
一騎当千 STORM EDGE

BLEYZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一騎当千 STORM EDGE

【Nコード】

N1987P

【作者名】

BLEYZ

【あらすじ】

”闘士”と呼ばれる者たち。そのものは勾玉を持ち、三国志の英雄の宿命を背負っている。勾玉を持たない青年はその世界に行き名にを思う。

この作品は処女作で主人公は最強（になる予定）です。苦手な方は戻る事をおすすめします。それでも言い方は楽しんでいただければ幸いです。

訪れた青年（前書き）

始めまして、BLEYZと申します。この小説は処女作品で、主人公最強（になる予定）です。それでも言い方は永い目で見てやってください。至らない点があると思いますがよろしくおねがいいたします。

訪れた青年

高校生が天下を取るために争う世界。そこでは常に戦いが起きていた。

日々、戦っている彼らには勾玉のアクセサリーを付けていた。その勾玉には遠い過去の三国志の闘士たちの魂を封じ込めた宿命の勾玉だった。

そこに勾玉を持たない一人の男がその世界に足を踏み入れる。

ガタン ゴトン ガトン ゴトン

「もうすぐで着くな・・・」

その男は電車の中で細長い袋を持って座っていた。何かを考えるようなそれでいてどこか悲しそうな表情で窓の外を見つめていた。

成都学園 そこには蜀の武将達が拠点としている場所

「な・なあ玄德・・・」

「はい？何ですか？関さん」

関さんと呼ばれた彼女は”関羽雲長” 三国志で劉備玄德、張飛益徳と桃園の誓いを交わし、蜀の武将として知られていた。
そんな彼女が頬を赤らめながら

「そ・そのな・・・い・一緒に・・・」

「？・どうしたんですか？顔が赤いですよ？」

眼鏡をかけた彼女は”劉備玄德” 三国志で民のために戦い、蜀の王となった。

そんな面影のしないほんとした表情で

「熱でもあるんですか？」

「い・いやなんでもない。それより一緒に！」

食事に行こうと言う言葉を小柄な少女がさえぎった。

「玄德。一緒にご飯たべよ」

「孔ちゃん、いいですよ」

そついうと二人で手をつないで歩いていく。

「あ・・・貴様！孔明！」

関羽が怒声で二人を止める。それに二人は振り向き

「なに？孔明はこれから玄德とごはん」

「それは最初に私が・・・！」

「なんや？どないしたん」

「なにか、ありましたか？」

そこにスナック菓子の袋を持った関西弁の女性と刀を持ち、目を閉じている女性が声を聞きつけ
はいつてきた。

「益徳・・・」

「どないしたん？怖い顔して？」

「いや・その・・・」

その言葉に戸惑っていた。自分の気持ちに気づき、正直に慣れたとしても、

人に言えることではない。そのことに戸惑っていると

「じゃあ、みなでご飯を食べに行きませんか？」

「行くつてどこに？」

「中華料理を食べに！」

劉備の提案で中華料理を食べに中華街に向かって歩いていった。何を食べるかそんな相談をしながらわきあいあいと進んでいた。

「なあ？なに食べる？」

「わたしはまた小籠包が食べたいです！」

前に食べたのが忘れられない嬉しそうな顔をしてそれを見ていた関羽が

（ああ・・・玄德・・・）

一人で妄想を膨らませトリップしていた。そんな道の先で

「ん？なんか人が倒れてるで！」

「え！どこですか？」

道の真ん中で細長い袋を持って、倒れている青年がいた。その袋が遠くから刀のような物だというのがわかるためトリップしていた関羽も張飛も警戒していたが

「だ・大丈夫ですか？」

劉備が無警戒でその人物に近寄って行った。それを見た関羽は追いか

「待て！危険なヤツかもしれないんだぞ！」

「でも！ほっておけないじゃないですか！」

そういつて男に近づいた。その青年は自分とたいして変わらない背格好、年も見かけでは近いと見てわかる。関羽は警戒していながら構えていると

ぐるるるるるるる

「は・・・腹・・・減った・・・」

そうつぶやいた

「あむ！もぐ！もぐもぐ！ごく！あもつもごもごむしゃむしゃ」

倒れていた少年を店まで運びご飯を食べさると次々に皿が空になっていく。その様子を見ていた彼女達は啞然とした表情で見っていた。ただ張飛だけは

「ちょ！自分ひとり食いすぎや！もっと遠慮せえ！」

食べる事が楽しみな彼女は青年のあまりの食べっぷりに突っ込みを入れた。彼の食べた量はすでに財布に冬を迎えるほど食べており、

楽しみにしていた中華料理は食べられず、少しなきそうな顔で今にもつかみかかろうとしていた。

「ま・まあまあ、張さん落ち着いて」

「これが落ち着いていられるかい！」

そこで青年が両手を合わせ

「ごちそうさま！」

満足そうな顔で言った。その顔が張飛を苛立たせ

「ごちそうさまなんわお前だけや！」

「落ち着け、益徳 それで？ どうして倒れていたんだ？」

「実はこの場所で少し知りたい事がありまして電車に乗ってここまでできたんですが

どこかで財布を落としてしまって」

「それで倒れていたのか」

関羽は納得といった表情で頷き、趙雲はその細長い袋を見て

「その袋に入っているのは刀ですか？」

「はい。聞いた話ではここはなにやら物騒だと聞

いて、自分は一応、

剣術に心得があるので」

「そうですか」

関羽は殺気がない事から戦闘意識がないのを確認し警戒を緩め、趙雲はどんなものか興味をもったまま視線をはずさず、劉備が

「知りたい事ってなんですか？」

そう聞くと彼は真剣な顔になり

「そうですね・・・あなた達に聞いて見ましょう」

そして聴いた言葉が

「呂布奉先についてしりませんか？」

訪れた青年（後書き）

最初はこんな感じですね。楽しんでいただければ幸いです。

偽る青年（前書き）

なにやらシリアスが台無しな感じで進みますが。それでもいいという方、楽しんでいただければ僥倖です。そしてこの青年はいつたい？
ではどうぞ。

偽る青年

この事を聞いた皆は、驚いた。”呂布奉先”は”董卓 仲穎”を道
ずれにして死んだ闘士。

なぜこの少年がこんな事を聞くのか疑問に思っていた。

「お前・・・名は？・・・」

「あ！申し遅れました。・・・えつと・・・」

嘘をつくのが苦手なのか齒切れが悪く、目を泳がせ

「如月 刃と申します。」

「・・・それ・・・本名か？」

「えつと・・・はは・・・」

その刃と名乗った青年は、ごまかすように笑いその行為が洛陽の者
ではないかと警戒させる事になる。関羽は青龍偃月刀を握っていた。

このものものしい雰囲気刃は

（あれ？なんでこんなににらまれてるの？もし
かして！）

突然、土下座する勢いで頭を下げた。その行動で驚き、劉備が

「どうしたんですか？」

「ごめんなさい！もしかしてご飯を食べ過ぎたから

みなさん怒ってるんですか？ お金がなくて

お返しできませんが

どうか！」

「「「「は？」「」「」

皆の声がハモった。青年の勘違いの行動に関羽は

（何かの策略？いや、いくらなんでもこれは・

）

青年の行動に疑うがマヌケな行動に呆れ

（なんやこいつ？アホかないな）

張飛はその行動に疑う事さえしなかった。

（・・・・・・・・・・）

趙雲は何かを考えている。刃はその空気に気づいたのか

「あれ？どうしたんですか？」

なにもわからないような顔をして、疑問を抱いている。そして孔明が

「なぜ、呂奉先のことを？」

「彼女とは知り合いで、死んだと聞き訪ねてきたんです。」

どこか悲しそうな表情をしてそう答えた。そして関羽が

「お前は洛陽の者なのか？」

関羽が唐突にそう聞いた。皆、一瞬緊張したが、しれっとした顔で

「らくよう？・・・なんですか？それ」

知らないといった顔だ。嘘をついているようには見えないが本当かどうか定かではない。そこに

「刃さん、私と手合わせをしてくださいませんか？」

趙雲が刀を片手にそう聞いた。

「なあ子ーさん？」

「はい？なんですか？」

「なんで手合わせなんかするんや？」

趙雲は顎に手を持っていき、「ふむ」とうつむいて

物の

「剣に心得があるのなら、手合わせでその人

ことを知る事ができるからですかね」

「そうなんか？」

わかっていなさそうに、鞘に収めたまま、刀を持っている刃に視線を向けた。

構えとしては居合いをするように構えている。その一連の動作からかじった程度ではない事が張飛でもわかった。

「関さんどうなると思えますか？」

「わからないただ・・・」

「ただ？」

劉備は覗き込むように顔を近づけた。

（うつ！玄德・・・顔が・・・／／／）

顔の近さに関羽がまたトリップしてしまった。彼女の目はすでに劉備の唇にロックオンしてる。

（ああ・・玄德・・／／／）

一人、脳内で暴走してしまっている。そこに

「玄德は孔明のもの」

そういつて孔明が二人の間に入っていく、ケンカになっている。その様子を見ていた。
張飛が

「なにやってんねん・・・」

呆れた顔し、向かい合っている趙雲と、刃に視線を向けた。

「準備はよろしいですか？」

「いつでもいいですよ」

そして、互いに剣は抜かず、柄に手をおいて、構えた。しかし両者とも動かない。互いに見つめ
隙をうかがっている。

（すこし当ててみましょう）

趙雲は強い殺気を刃に当てた。しかし刃は動じず

「綺麗な殺気ですね。鋭く・透き通っている」

その殺気を心地よく感じている表情。趙雲は、どう攻めるか思案しているところで刃がこう告げた。

「そろそろいかせてもらおうよ！」

「!!」

突如、彼から強烈な殺気が胸を貫いた。それは自分を死んだと錯覚させるほど

趙雲は飛び下がり、息を切らしながら、胸を押さえた。

（貫かれていない？まさか！）

シャキン 「終わりですね」

刀を突きつけ、彼女を見下ろしていた。その一瞬の出来事で関羽出さえも何が起きていたのかわからなかった。

「な？なにが起きたんですか？」

「い・いやわからない」

「うちにもさっぱり」

「……………」

刀を鞘に収め、趙雲が刃と一緒に戻ってきた。

「すみません。負けてしまいました。」

「なにが起きたんや？」

「彼から強い殺気を受けて、隙を作ってしまった、負けてしまいました。」

彼女は悔しそうな顔はせずすがしい表情で答えた。そこに関羽が

「強い殺気？」

彼女が疑問に思い、張飛も首をひねった。二人の戦闘中に趙雲以外に殺気を感じなかったからだ。

「刃から殺気、感じたか？」

「いや、うちはなにも感じてへんよ」

その答えに趙雲も疑問を抱いた。そして視線を刃に向け

「どういことですか？」

「それは僕の技ですよ。月影流威圧術・影殺し殺気を細く、鋭く凝縮し、相手に飛ばし、相手の放つ殺気を切り裂いて威圧する刀技

です。」

その答えに納得した。殺気を小さくする事で周りに感じさせることなく殺気を相手にぶつける事ができればその対象のみに効果を発揮する。

「感服いたしました。剣の腕前が見られないのは残念ですが・・・」

「いえいえ、趙雲さんも綺麗な殺気でとてもいい腕ですよ。」

互いが謙遜しあっているところで、

「なぜ名前を偽っているのですか？」

そう聞いてきて、うつむいた。周りも疑問に思っている。皆の探るような視線に諦めたように

「姉さんに言っなって言われてただけど・・・

まあいいか・・・」

そして向き直ってゆっくりと

「うそ言ってごめん。僕の本当の名前は・・・

」

静かにこう告げた。

「呂布奉先」

偽る青年（後書き）

はい。なんか2話ですでにシリアス前回だな・・・そして文才がほしい。

作風は壊れないように書いたつもりです。（あくまでつもり）ここからいろいろオリ設定になるかと思っています。戦闘描写は・・・打ち合っていない！ここから先が

心配だ・・・自分でもどうなる事やら。こんな小説でも暖かく見守っていただくと嬉しいです。感想で、こんな展開がいい！とか、とかも期待してます。

・・・貂蟬だしてみようかな？意見待ってます。

真実を語る（前書き）

どうも、この主人公は抜けてる感がありますね。というか詳しい設定書いてないですね。今日中には投稿いたします。しばし、お待ちを
ではどうぞ

真実を語る

彼の本当の名を聞いて、静まりかえった。前の戦いで呂布奉先は確かに洛陽学園にいた。

しかし、目の前に”呂布奉先を名乗る。青年がいる。皆疑いの眼差しをしていた。

「バ・・バカな！お前が呂奉先だと！」

「そんなはずないやろ！呂布は女やったで！」

「え？・・え！・」

そう。死んだはずの者の名を名乗っている。誰もが偽者だと疑っていた。

んですから。

「そう思うのも、無理ないですね。闘士は一人なでも僕は、ここにいた呂奉先と・」

青年は続けた。

「双子の弟なんです。」

「ふ！双子の弟やて！」

「バカな・・そんな事が」

「ふええ、そんなんですか？」

劉備は感心したように。他はその事実さらに驚いている。孔明と趙雲は

「趙雲、どうみる？」

「はい、軍師 嘘をついてるようには見えません。もつとも嘘をついていれば顔に出るのですぐにわかるでしょう」

「はは・・・」

わかりやすいと言われ、呂布から苦笑いがこぼれる。他の皆も趙雲の答えに納得し、嘘でない事はわかった。

「しかし、双子とは・・・」

関羽は、考えるように疑問をもらす。他の皆も疑問に思っていた。それもそのはず
闘士は、三国志の英雄の魂が現代に受け継いだもの。当然一人であり、双子など聞いた事がないのだ。

「これは予想なのですが」

青年が答える。

「三国志において、呂布とはどういう存在だと思いますか？」

青年が唐突にそう答える。皆がそのことを考えた

強さは

「呂布とは裏切りの代名詞ではありますが、その

った武将」

三国に並ぶものなしといわれるほどの強さを持

その言葉に皆、深く考える。確かに呂布とは裏切りを重ねていた為に裏切りの代名詞となったが
その中で出てくるものには”人中の呂布””飛將軍呂布”などの異名が付けられている。
そして青年は続ける。

「おそらくその力は、龍と同等の力があつたんだ
と思います。

”双子”

その大きすぎる力は人に宿す過程で二つに別れ、
という形になったんじゃないかって思っ
す。」

お茶をズツと一口のむ。歴史の中で呂布の活躍は”最強”の一言
につきる。

小人数で100万の張燕の軍政を打ち破ったり
劉備三兄弟相手に一騎打ちをし、それを圧倒させるなどの武勇が存在する。

「まあ、あくまで予想ですが。」

「軍師、どう思いますか？」

「否定はできない」

孔明が納得し、皆も同意と言った様子。話し終えて、青年が表情を変え、質問した。

「次は、僕にも聞かせてください。姉さんがどういう最後だったのか。」

あの・・・優しくかった姉さんが・・・死んだのか・・・

「

真剣な目で皆をみる。その目は悲しみ、しかし真実を聞く覚悟をした目だった。

「私たちが知っているのは、董卓 仲穎とともに
自害したと・・・

それだけしかわからない」

”すまない”といった表情で首を横に振る。皆も暗い表情で下を向く。

「そうですか・・・」

青年もそれ以上は聞かないといった顔で姿勢を正す。

「ありがとうございます。教えていただいて」

「いや、かまわない」

そこで趙雲が問いかける。

「すこしよろしいですか？」

「はい？」

「なぜ、呂布の勾玉をあなたではなく彼女が？」

趙雲が聞いた問いに皆がいつせいに視線を向ける。

「それは姉さんが望んだんです。僕を守るために
つて。」

「守るため？」

「はい。姉さんよりも僕の氣の力の方がずっと
強いんです。」

今は、自分で封じていますが。」

青年がそう答える。確かに、呂布といいながらも感じる氣の量が少ないように感じる。
これを自ら封じているなら説明がつく。

「姉さんが言っていました。この力を董卓 仲穎の
闘士に悪用されないようにと」

そして、裏切りの宿命に抗うと・・・」

「そうですか・・・」

趙雲は疑問が晴れたような表情をして座り、青年は問いかけた。

「そうだ。他に姉さんに近しい人を知りませんか？
もっと詳しいことを知りたくて」

「ならば南陽学院に行け。そこに呂豪子明なら詳しい事がわかるだろう」

私たちの知る中で、もっとも近しい者だったはずだ。」

関羽がそう答えた。それを聞いた青年は、

「本当ですか！ありがとうございます！」

そついい、刀を手に立ち上がり、

「では！ありがとうございます。」飯ごちそう
さまですー！」

そついつて、走り出した・・・が

「あ！」

思い出したようにいきなり止まり

「僕、姉さんに二人とも呂布じゃわかりづらい
だろうからって

”刃”って呼ばれてたんです。苗字は思いつ
きで・・・」

気恥ずかしそうに苦笑い、そして

「また縁がありましたら〜では！」

颯爽と走り去っていった。その様子を見ていた皆は

「騒がしい人でしたね〜」

「そうだな」

「いいわけあるかい！話に夢中で忘れてたけど
うちのご飯がああああ〜！」

張飛は食べられなかった事を思い出し、なきながら叫ぶ。

「しかし驚きましたね。あの呂布の弟とは・・・」

「

「まったくだ」

青年が去っていった方を見つめながらつぶやいた。そこに

「ところで南陽学院の場所をあの人は知ってる
んでしょうか？」

「「「「「あ・・・」」」」」

劉備のつぶやいた一言に皆の声がユニゾンした。

真実を語る（後書き）

タイトルがこれでいいのやら。詳しい主人公設定は次ですので、どうぞ読んでやってください。

この作品は処女で作者の思い付きです。うまくできているか心配だ・

これを読んで面白いと少しでも感じていただければ、うれしいです。

主人公紹介

呂布奉先”刃”（ジン）

特徴：緑の髪に腰まである長髪を後ろで束ねていて、（ポニーテール）右目に眼帯を

している。（刀の鍔）

服装は黒い学ラン

武器は刀で流派は”月影流”主に氣や殺氣の扱いに優れ、氣を刀に纏わせる

ことができる。

性格は、温厚、礼儀正しく、自分よりも他人を優

先する。

ただ、悪いやつには容赦がなく、本当に許せないやつには口調がかわる。

しかしうつかりなところがあり、エアリーデイングレベルが低い。

方向音痴でもある。

姉のいたところでは危険と思ったが為に山のふもと
の田舎に剣の修行を

しながら暮らしていたが、風のうわさで姉の死を
聞いたため、

真実を知るため、この地にやってきた。

技

月影流威圧術 影殺し：殺氣を凝縮し、相手に
死を錯覚させる。

死んでしまうので通常は弱め

並みの相手では本当に

月影流抜刀術
し、大きな三日月の形をした

三日月 影払い：抜刀の構えを

の敵を倒す。

真空波で多く

月影流乱撃術
さい三日月の形をした真空波を

三日月 影乱れ：刀を振り、小

無数に飛ばす。

月影流刺突術
刀を少し抜き、当たった瞬間に

月下 二影：不殺の技、鞘から

二つの衝撃を発生させ、威力を
勢いよく刀を納め、
上げる技

月影流歩法術
な歩法で移動、その場に

朧月：体に薄い氣を纏い、特殊
いるかのような幻を見せ

る技

月影流奥義
力を上げる技、刀によって

月光 満月：刀に氣を流し、攻撃

るため見極めが必要。

流す量も時間も変わ

習得よりも維持が困

難な技

月影流刺突術 月割れ 影落とし：広範囲に特
化した技、原理は月下 二影と同じ

こんな感じですかね？自分の想像するキャラって

センスね〜な〜って

”描いてて”思いました。

眼帯キャラにしたのはそのほうが”カッコ

イイ”からです（↑アホ）

ただ眼帯キャラにするとなんか抜けた感じのキャラにはならないのかな？

あと呂豪とかぶる可能性が・・・刀の鍔にしてみたのは呂豪とかぶらせない為の

”伏線”です。

他にも詳しい事は後日、付け加えていきます。

何か技が中二病な気がしてきた。二影についてはあれです二〇の極み

みたいな感じですね。

南洋学園の場所（前書き）

どうも、BLEYZです。主人公の表記についてですが”呂布”よりも”刃”で

いこうと思います。その方がオリ主らしいので。

南陽でなくてすみません。

今回は少しネタに走って見たかったので書いてみました。

楽しんでいただければと思います。

それではどうぞ。

南洋学園の場所

刃は歩いていた。南陽学院に向けて……

「こ……こ……どこ？」

刃は激しく後悔していた。

「ちくしょー場所くらい聞いとけばよかった……」

体勢をorzにしながら、頭の中では激しく自己嫌悪中、周りの人も不審な目で

「なにあれ」 「おかあさん、あの人なにしてんの？」

「しっ！見ちゃいけません」

刃を持っている事もあり、不審な目に拍車がかかった。そんな前から……

「なんだべ？あいつ」

「さあ？知らん」

「金でもたかるか？」

ガラの悪い不良が寄ってきた。その目は明らかに悪意がこめられていた。

いまだに自己嫌悪中の刃を不良どもが囲み

「おい！」

「はい？」

その声に刃が顔を上げ、

「何ですか？」

「俺さ、今、金に困ってんだわ。だから貸して」

「まあ！返す気ないけど」

「つまり、ちょうだい」

不良どもがその事でゲラゲラ笑っているとその無理なことに刃が面白くない顔をして

「これは俗に言う、”カツアゲ”というやつか？」

「ああ！ちげーよ。頼んでんだよ！」

「一方的な物言いは頼むとは言わんぞ？」

「おい！てめえ調子こいてんじゃねえぞ！」

一人の不良が殴りかかった。それを刃はヒラリとかわし

「そうか・・・暴力にものを言うのなら・・・」

笑った表情をしていたが、目が笑っておらず、黒い笑みを浮かべ

「少し、O S H I O K Iをしてやろう・・・」

「「「は？」」」

その瞬間、刃は一瞬で不良たちの間を通り抜け、すれ違いざまに不良たちに
制裁の鉄拳を打ち込んだ。

「ぎゃあっ！」

「ぐお！」

「ぎいつ！」

それだけでは終わらず、不良どもに容赦なく、どんどん拳を打ち込んでいく。

不良どもはなすすべなく、殴られていき、

「さあ！お前たちは何人の人にカツアゲしたんだ？」

次第に不良たちは殴られたまま、中に浮き、地面から離れていく・・・
その様子を見ていた人たちも徐々に高さが上がっていくのを眺めていると

「これで、トドメだ！」

三人を空高く蹴り上げ、高く飛び上がるそして

「くられ！ 隼落とし！」

三人が重なっているとところを体全体が縦に一回転しながら踵を落とす。

腰を”く”の字に折り地面に向かって落下していく。
不良たちは地面に打ち付けられ、逃げようとするが刃が一瞬で追いつき

「まあ、まして少し O H A N A S H I O しよう
か・・・」

にこやかな笑顔でありながらも、どこかドス黒く、後ろから般若がこちらを見ているような幻覚
が見え、不良の一人は

「ぎゃあああああああ」 ドサッ

気を失った。その様子に不良たちは何をされたのかわからず、仲間の一人が気を失った事に
さらに恐怖した。そして、刃がもう一人に視線を向けると・・・

「ひっ！・・・あっ・・・」 ドサッ

また一人気を失った。実は、二人に趙雲としたことの劣化版を二人にしていた。そもそも

月影流は、氣や殺氣の扱いに優れた流派。並みの者が相手なら殺氣だけで対処できる。しかし

殺氣をタダぶつけるだけでは周りに広げ、関係ない者まで巻き込む。ゆえに殺氣を凝縮する

”影殺し”を使った。だがそれも趙雲に死を錯覚させるほど、弱めなければ本当に殺してしまう。

ゆえに劣化版。

だが、そんな事など知らない不良からすれば・・・

（なっ！なんで！気を失って）

目の前でわからない事が起き、頭の中は錯乱状態。平常心を保てないでいる。

そして

「残るはお前だけだ。さて・・・」

（こっ！ 殺される！）

不良は内心、ビクビクしながら祈るように震えていると・・・

「南陽学院の場所を教えてくださいませんか。」

「え?!」

予想していた答えと違ったため、変な声で返した。刃も”やりすぎたか”と言わんばかりの顔で続けた。

「いや、南陽学園の場所を探していたんだがわからないかな。
くてな。

どこかしらないか？」

不良は命が助かったことに呆けた顔押したまま、南陽学園の場所を教えると

「そうか、すまない助かった。」

そっいつて背を向け歩いて

（殺気だけで脅かせばよかったかな？・・・）

当たり前のことに今気づき反省しながら歩いて行った。

不良はしばし呆然としていたがすぐに気を取り直し、倒れていた仲間を起こして、こんな噂を立てていった。

” 緑の髪をした般若が刀を持って、南陽を血の海に染め上げるため

場所を探している”と

この噂が広まってから南陽学園では常に警戒態勢が開かれ、孫策は戦う気に

呂豪も町を見回っていて、南陽ではものものしい雰囲気になっていった。

そんなことはつゆ知らず刃はというと・・・

「・・・どこ？・・・どこ？・・・」

彼は・・・方向音痴のようだ・・・

南洋学園の場所（後書き）

いかがでしたか？ 自分はすべて思い付きです。今回は少し短めだ
と思います。

楽しんでいただければ幸いです。感想をお待ちしています。

笑いについてもこうした方が面白いなどの意見も受けています。
ただやりすぎると原作の作風を壊しかねないなあ

南陽？・・・許昌！？（前書き）

どうも、南陽にしてもよかったのですが、突然ひらめいていそいで描いてみました

ただ・・・曹仁の口調は・・・こんな感じで良かったのでしょうか？
それでもいいという心の広い方、楽しんでいただければ嬉しいです。
ではどうぞ

南陽？・・・許昌！？

刃は学校の前に立っていた。

” 許昌学院 ”

（あれ〜〜〜なんで、許昌学院？言われたとおりに行ったのに）

刃は道を歩いていくうちに、方向徐々に変わっていき、別のところに来たようだ。
方向音痴の彼にそんな事がわかるわけもなく。

「そうか・・・あの男が嘘を教えたのか・・・はは・・・」

「

壮絶に勘違いをし、勝手に納得していた。学校に向かう生徒は彼を凝視していた。

見たこともない制服で刀を持って校門前で不気味に笑っているのだ。血の気の多いこの学院では、殴りこみと見られても不思議ではない。

「おい！てめえ」

「はい？」

黒い笑みを止め、声をかけてきた人に顔を向ける。そこには
そろそろとガラの悪そうな人たちが・・・

「え〜と・・・なにか？」

「「「「「「「」

そして、戦いが始まった。

「なんだ？あいつ」

その様子を見ていたのは曹仁 子孝、許昌の警備隊長でAランク（自称）らしい・・・

「殴りこみか？」

うちの学院の生徒が彼のもっていた刀を蹴った。その青年は怒ったのか。拳を握る。その拳が

うつすらと黄緑に輝き、刀を蹴った男を殴り飛ばした。

その男は壁まで吹っ飛んでいき、壁にめり込んだ。それを合図に、戦いが起きる。

「こっしちやいられない！」

許昌の警備隊長としての責任かその男のどこまで駆ける。

戦いが始まり、刃は集団の敵を相手に戦っていた。決して鞘から刀を抜くことなく、

一人の攻撃をかわし、即座に手刀を打ち込む。二・三人同時に来た時、攻撃をいなし別の敵にその攻撃を誘導する。動きの一つ一つに無駄がない。

「面倒だ！一氣に片付ける！」

” 月影流拔刀術 三日月 影払い ”

拔刀の構えから、鞘ごと刀を振るう。大きな三日月の形をした真空波が敵を襲う。もちろん、刃はないので切れないが、多くの敵を巻き込み、なぎ倒してゆく。

「まだだ！」

” 月影流乱撃術 三日月 影乱れ ”

無数の小さな三日月の形をした真空波が多くの敵を襲い、気がついたら残りは少数のみ、そこで刃は

（あれ？何でこんな事に・・・てか！しまった〜）

〜

刀を蹴られた事に対する怒りで我を忘れ、気がついたら少数しか残っておらず

自分のしでかした過ちに気がついた。

（なんで・・・こんなことに・・・）

早く南陽に行かなければと思いつつも、しでかしたことに自己嫌悪しはじめた。そこに

「おい！お前！」

女性の声がしたが刃からはそれどころではなく

「どうせ僕は・・・」ブツブツ

まったく聞いていなかった。その事に腹を立て

「話を聞け！」

と続けるが・・・

「はあ～～昔から運が・・・」ブツブツ

それでも聞いておらず、女性は

「無視すんな～～～～」

叫びながら殴りかかった。しかし

ヒョイツ

ヒラリとかわす、氣や殺氣の扱いに慣れているという事は、氣や殺氣を感じることにも優れているという事、無意識にそれをかわす。

「や・・やるじゃないか！、でもt「うるせー！」」

ガツン！

刃は刀の切っ先（鞘あり）で額を一撃、あっさりと倒した。その事に気づく事もなく再び、自己嫌惡を始める

「やっぱり・・・戻つてばsh!!」

弱い殺氣に意識を集中させ、背後からの攻撃をよけた。今いた場所を通過したのは
”暗器” 暗殺に使用する武器。刃は自己嫌惡から戻り、その使い手を見た。

「その暗器はあなたが？」

「今の・・・避けるか・・・」

「いきなり、後ろからの不意打ちとは・・関心しませんね」

その女性はこれ以上、しゃべることなく刃に攻撃を仕掛けてくる。刃は暗器と体術で攻める攻撃に、見切ろうとしている。しかし、そ

の動きに翻弄されていた。

（つよい・・・先のヤツとは比べ物にならない）

距離を開いても暗器で攻撃、詰めても隙がない体術で圧倒してくる。

「クッ！」

一瞬の隙、その隙を見逃すことなく

「ふっ！」

「ぐあっ！」

蹴りが腹部に直撃、刃は痛みにも耐え、暗器を使う女性に

「あなた・・・名は？・・・」

「夏侯淵・・・妙才・・・」

「なるほど・・・どおりで強いわけだ・・・」

呼吸を整え、刀を構え

「本気でいかせていただきます」

静かに構える。温厚な顔が鋭い目つきに変わり、殺気を漏らす。その事に夏侯淵は身構えた。さつきと比べたときと威圧感がまったく違うのだ。そして、

”月影流威圧術 影殺し”

殺気を飛ばした。夏侯淵は一瞬、自分が殺されたと思いふらつき、大きな隙を作らせた。その隙に刃は

”月影流刺突術 月下 二影”

刃は鞘から刀を少し抜き、当てると同時に鞘を勢いよく収めた。刀でも突けば、刺さる

この刺突術は不殺を前提として作られ、鞘から突いただけでは、たいした威力は得られない。

そこで鞘から刀を少し抜き、当たると同時に収める事で、衝撃を二つにする事で威力を上げる技

夏侯淵は、それに耐え切れず、膝をつく。

「ぐあ……」

「すみません、手荒にするつもりはなかったんです
が手加減ができなかったもので」

申し訳ないと言った顔で、頭を下げる。

「争いをしにきたのではなく、南陽に行きたいので
すがわかりませんか？」

「それならここからむこうにまっすぐにあるぞ」

倒れて、伸びていた曹仁 子孝も目を覚まし、その方角に指をさす。

「・・・道がないんですけど・・・」

「その方がわかりやすいだろ？」

「確かに・・・助かりました！ では！」

そういつて走り去っていき、言われたまま、まっすぐの道のない場所を飛び超え、壁を蹴り走りぬけていく。

「あいつ・・・結局なんだったんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人とも、刃が去っていったをただ見つめていた。

南陽？・・・許昌！？（後書き）

やっぱり曹仁の口調わかんね〜。なんか普通というか・・・別の
人というか・・・

次は絶対に南陽でいくので待っていてください。

感想や意見待ってますのでよろしくおねがいたします。

激突！南陽学園（前書き）

こんにちは、BLEYZです。 やつと南陽に着きました。
戦闘描写は自分ではなんとなく納得できていないと感じています。
物足りなく感じるでしょうが、それでも良いという方
楽しんでいただければ幸いです。
それではどうぞ

激突！南陽学園

「や・・・やっと着いた・・・」

刃は学校の門前の文字を読んでいた。

” 南陽学園 ”

「ほ・・・本当に・・・着いた・・・」

刃は泣きそうな顔をしたまま立ち、歡喜に体を震わせていた。

（思えばいろいろ巻き込まれて、これなかったけどついに・
・）

校門前で刀を持って立って涙ぐむ様子を通りすぎる生徒は警戒していた。

少し前に聞いた噂

” 緑の髪をした般若が刀を持って、南陽を血の海に染め上げるため場所を探している ”

この噂で生徒は警戒態勢をしていたが、何も起きなかったため噂と安心していたが
般若ではないが” 緑の髪 ” に ” 刀 ” を持っていたため、周りは怖がっていた。

そんな事を知らない刃は

(?・・・なんでこんなに見られてるんだ?)

周りの目を不思議に思っていた。

「あの～すみません」

「ひい!」 「うわ!」

呂豪子明のことを訪ねようとしただけで怖がられていた。

(ぼ・・・僕のガラスのハートに傷が・・・だが諦めるものか!)

最近は似たようなことが多くなり、耐性がついてきたのだろう・・・
・が

「あの～」

「きゃああああああああ」

(なんでだよ!・・・本当に泣くぞ!)

女性の悲鳴は耐えられないようだ。そこに

「おい!貴様」

「はい?」

泣きながら振り向いたそこには眼帯をつけた女性が仁王立ちしてい

た。

「貴様か？噂の般若と言つのは」

「噂？般若？」

自分が噂になつてゐる事を知る由もなく、頭を傾ける。
相手の目からは強い敵意が向けられ、

「緑の髪に刀、特徴は似ているな・・・」

「えっと・・・なんの話でs」とぼけるな！」

女性は拳を握り、一気に近づき振り下ろす。それに気づいた刃はすぐさま後ろに
飛び下がりを避ける。自分のいた場所には大きな亀裂がはしっており
周りの地面が浮き上がっていた。

「いきなり何するんですか！」

「お前がこの学院を襲いに來たのはわかつてゐる」

「はいいいい！？」

女性はさも当然といった顔で立っている。刃はさっぱりわからず自分の不幸に
嘆いていた。

（なんでだろう？最近こんな事ばかりだ・・・）

「いくぞ！」

女性は構え、刃は

(どうにでもなれ~~~~~)

ヤケクソになって構えた。

戦いの火蓋が切って落とされた。

「伯符~~~~！」

「どうしたの？公瑾？」

屋上でのんびりとしていたのは孫策伯符、南陽学院の当主公瑾と呼ばれた男性は周瑜公瑾、孫策伯符の幼馴染。

「噂の般若がこの学校に来たって」

「え！ほんとに〜」

バトルマニアな彼女は嬉しそうな顔をして、目を輝かせた。それを見た周瑜はため息をついた。

「ハア〜・・・まあこういう性格も今に始まった事じゃないけどね・・・」

「だって般若だよ？気になるじゃん」

「そうだけど・・・てっ！それどころじゃなくて、今、呂蒙さんが戦ってるよ！」

思い出したかのように言い、孫策は

「ええ！じゃあさ！早く見にいこ！」

そういつて走り出し

「あ！待ってよ！」

それに続いて、走り出した。

「はあああああ」

呂蒙の蹴りをかわし、即座に回り込む。呂蒙はそれに反応し、振り向きざまの裏拳を放つが

「ふっ！」

「ぐっ！」

裏拳を避けると同時に、わき腹に手刀を打ち込んだ。

「え〜と・・・話をk「問答無用だ！」え〜・・・」

もはや、言葉は通じず攻撃を仕掛けてくる。右の正拳を受け流そうと左手を添えると・・・

「はあ！」

「なに！」

その腕をつかまれる。そして、そのまま引き寄せられ、そして掴み、かけられる。

「これで、終わりだ」「はああー!」「!」「!」

完璧にきまらなかったのか、手から逃れられた。

「いいでしょう・・・そこまでやるのなら・・・」

刃は構えなおし、殺気を強め

「本気で行きます！」

先ほどとは比べ物にならないほど強い殺気、呂蒙は身構えていた。

（これがこいつの本気か・・・）

”強い” そう感じたからこそ、隙を窺いにらみ合っそして

”月影流威圧術 影殺し”

凝縮された濃密な殺気、それが呂蒙の胸を貫いた。

（な！）

呂蒙はその感覚に死を錯覚した。刃はすかさず”月下 二影”を放とうとしたが

「はああああああ」

「なに！」

呂蒙は臆することなく近づき、

” 天地白狼撃 ”

「がはぁ！」

後ろに飛ばされ、壁に激突する。倒れながら、刃は目を見開き

（この技は！）

呂蒙が放った技に驚いていた。

「終わったか……」

「蒙ちゃ~~~~ん」

「孫策か？」

孫策が手を振りながら近づいてくる。後ろには周瑜もいた。

「蒙ちゃん！どうだった？」

「いや、たいしたことはない」

そう答えながらも一瞬感じた死に呂蒙は考えていた。
自分の死を感じたのは初めての事だったからだ。

（あの時感じた死なんだったんだ？・・・）

「呂蒙さん！後ろ！」

「・・・！なに！」

振り向くとそこには

無傷で立ち上がる青年がこちらを見ていた。

「バカな！無傷だと！」

「・・・・・・」

しゃべることなく見つめる目は驚愕の色があった。
呂蒙は構え、

「貴様！いつてどこで！！」！

「この技をどこで覚えた！！」

青年は叫ぶ。呂蒙は彼の激昂に戸惑い

「どういうk」「この技は!！」」

「この技は”姉さん”の技だ!」

呂蒙は驚いた。この技は洛陽高校の今は亡き”呂布奉先”の技
それを目の前の青年は”姉さん”と答えた。

「貴様・・・何者だ・・・」

そして少年は

「僕の名前は・・・」

その名を名乗る

「”呂布奉先”だ」

激突！南陽学園（後書き）

戦闘描写いかがですか？”影殺し”をよく多用していますがこれではワンパターン

ですね。もう少し、考えて見ます。

天地白狼撃は呂蒙も使っていたので、いい感じなのではないかと思いつてみました。

この内容で楽しんでいただければ嬉しいです。

感想お待ちしております。またこんな展開、要素、笑いなども受け付けています。

呂布奉先（前書き）

どうも、BLEYZです。今回はシリアスで進んでいきます。
なにやら色々な設定で進んでいきますがそれでも良いという方、
楽しんでいただければ僥倖です。
それではどうぞ

呂布奉先

「な・・貴様が呂布だと！」

呂蒙は怒りをあらわにした。過去、彼女に対する感情は怒りであったが

今は、掛け替えのないものになっている。

そんな存在を語る、目の前の青年を許すことができないでいた。だが刃は

「あなたがそう思うのももつともですが、僕はあなたが知る

呂布奉先と”双子”の弟なんです」

「な・・何!・・」

そのことに、呂蒙だけでなく、皆が驚いた。

「ええ!弟!？」

「そんな訳がないだろう！」

呂布はそんな事、一言も・・」

刃が何かを思い出すかのように目を瞑り、語る

「姉さんは言っていました。裏切りの宿命に抗うと・・・」

「!」

呂蒙が目を見開いた。その言葉は昔、ある道場のいた時、呂布から聞いた覚悟の言葉
滅びる運命だとしても宿命に抗い続け、私に思いを託した日

「歴史を変えると・・・自分の意思を貫くと・・・」

青年は目を瞑ったまま語り続ける。次第にその顔は悲しみに満ちた顔に変わり

「そんな姉さんが死んだと聞いた。それを確かめるためにここまで来たんだ！」

その瞳に涙をにじませ、覚悟を籠めた目で見つめる。

「だから、教えてほしい！姉さんの最後を！姉さんの思いを！」

「・・・・・・・・・・」

呂蒙には、その言葉で疑うという考えは消えていた。
静まり返った空気　呂蒙が口を開く

「・・・・・・・・ついてこい」

そついい、歩きはじめる。刃もそれに続いて歩き始める。
静寂した空気を残して・・・・・・・・

「ねえ？公瑾・・・」

「何？伯符？」

孫策が疑問を問う、周瑜も聞かれる事はわかっていた。

「本当に弟がどうかって事だろ？」

「うん・・・」

この場にいた誰もが思っていることだ。周瑜は考えるようにうつむき

「わからない。でも呂蒙さんがあ言ったのなら何か
思い当たる事があるのかも・・・」

「そうなのかな・・・」

左慈の一件で呂布に対して思うことがあるのだろう。いつも元気な彼女もこのことについては真剣になっている。
その視線は彼の歩いた方向を見つめていた・・・

「ここでいいだろう」

森の碑石の前に来ていた。刃も神妙な顔で

「教えていただけますか？姉さんの事・・・」

「ああ・・・」

何かを考えるように目を瞑り、

「呂布がどういう最後かは、知っているのか？」

「董卓 仲頼ともに自害したと・・・それくらい
しか・・・」

しらないそんな顔でうつむいた。それを見ていた呂蒙は一つ一つ語り始めた。

呂布との出会い、王允 子師との関係、何を思い死んだのか・・・

語り終えた時、刃は

「そうか・・・最後まで自分の意思を・・・」

頭を垂れたまま返したが、すぐに向き直り

「ありがとうございます。教えていただいて」

「いや・・・」

かまわないといった顔で返し、

「私も教えてくれないか？幼い頃の呂布を」

「そうですね・・・昔は元気でよく外で遊んでいました。」

昔の楽しかった記憶を思い出し、笑みを浮かべながらつぶやいた

「あの頃は毎日が楽しかった、森に探検に行ったり・・・川で遊んだり・・・」

「そういえば・・・姉さんだけじゃなくて宮ちゃんもいたな。」

「宮ちゃん？」

「陳宮さんですよ。姉さんが突然連れてきたんですよ」

陳宮 公台、三国志に呂布と共に名を馳せた軍師。呂布同様亡き者となっている。

「その・・・陳宮は・・・」

「知っています・・・そのことも・・・」

顔を伏せ、思いにふける。しかし、刃は続ける

「姉さんが悲しい顔をするようになったのは闘士の勾玉を継ぐときからでした

その宿命知ったとき・・・どちらかが継がねばならないと聞かされたとき・・・」

悲しみに満ち、涙を浮かべながらそれでも刃は語り続ける

「姉さんは進んでその勾玉を継いだ・・・僕を守るためと・・・」

裏切りの宿命・・・そんな宿命とわかっていて受け継ぎたいとは思わないだろう。

それでも彼女は継いだ、それが大切なものを守るためらなと・・・

「・・・そうか・・・」

呂蒙は彼女の事を聞き、考えるように空を見上げる
その空は雲がなく、どこまでも晴れていた・・・

時間が経ち、あたりが茜色に染まった頃

「呂蒙さん、ありがとうございます。」

「ああ、私もありがとう、呂布の事を聞かせて
もらって」

姉の事を聞き、帰路に戻るため別れをつける

「もう帰っちゃうの？」

「伯符！無理いうなっの」

孫策が残念そうにつぶやき、周瑜がツツコミをいれる

「ええ、お世話になりました。」

「次会った時はあたしと手合わせするっしょ！」

ビッと拳を向ける、それに刃は

「はい、是非」

にっこりと笑って答えた。

「そうだ、僕、姉さんに二人とも呂布だとわかりにくいからと

刃と呼ばれていたんです。そう呼んでください。」

「わかった。またいつでも来い」

「元気だね」

「じゃ〜ね〜」

それぞれ分かれの言葉を交わし、踵を返して歩き始める。

「それでは〜〜!」

そういつて家に帰るため駅に向かって歩き出した・・・のだが・・・

刃が駅に向かって歩いている途中、街中のテレビモニターに

「今日、午前7時ごろ、。山が土砂崩れになり、
電車が止まりました。」

。駅から。駅までは電車を走らせていますが
。駅までは土砂の

影響で進めず、線路の普及に最低でも三週間はか
かるとの事。なお・・・」

「なん・・・だと・・・」

呂布奉先（後書き）

最後ネタになってしまった。

。とか とかは地名が思いつかなかったのだ

王允と左慈を分けたのはこの後に出るかも知れないからです。

こういった内容でも見ていただけると嬉しいです。

それではまた次回

関羽の怒り！呂布の戸惑い（前書き）

どうも、更新が遅れ、文も短くなりました。すみません
今回からは蜀をメインに進もうかと思っています。

これを読めばわかると思いますが”XX”後の話となっております。
いいタイトルが思い浮かびませんでした。^^；

このような小説でも良いという方、楽しんでいただければうれしい
です。

それではどうぞ。

関羽の怒り！呂布の戸惑い

刃は立ち尽くしていた。電車で来た身なので、当然帰りも電車なのだが

テレビから聞こえたニュースの内容に啞然としてた。

（今日で・・・一番の不運・・・）

どうする事もできず、テレビを眺めていた・・・

「いや～！やっぱ中華はうまいな」

「はい！小籠包おいしかったです！」

「ボクもあんなにおいしい中華初めて食べました」

楽しげな雰囲気歩く一団、劉備、張飛、関羽、趙雲、孔明そして
馬超

馬超 孟起、五虎大將軍の一人にして劉備に”錦馬超”と言わしめ

た武将

大闘士大会後、成都学園に転校してきたのだ。

あの後、一旦引き返し、中華を食べるため、再度、中華街に行き、舌鼓をうった後だった。

張飛も先ほどは食べられず、わめいていたが、食べられたことにより満足そうな顔をしていた。

「にしてもあいつ・・・一人でバクバク食べよってからに・・・」

「まあまあ、いいじゃないですか。食べられたんだし」

先のことを思い出し、再び怒りを露わにするのを劉備がなだめる。それでも収まらず

「いいわけあるかい！あいつのせいで食べられへんかったんや！
今度見つけたらぶっ飛ばす！」

拳を握り締め、そう叫ぶ、

「無理ですよー子ーさんでも勝てん」やかましー！
「いふあいれふ」

張飛の決意を叩き折る返しにほっぺをつねり、もみくちやにするそれに劉備は涙ぐみながら

「ふおれでふあ、かへるんれふか？」

「そ・・・それは・・・やってみなわからんやろ！」

「やめろ、益徳！」

さらにつねる張飛を関羽がとめる。

「大丈夫か？玄徳」

「はい、関さん！ありがとうございます！」

にこやかに答える劉備を見て、

「！／／／」

彼女の視線に真っ赤になり、脳内ではいろいろな妄想が
繰り広げられていた。そこに

「玄徳、手つなご」

「いいですよ。はい」

手を差し出し、仲良く歩いている。その様子を見て
関羽は慌てて

「まて！」

「？ どうしました？関さん？」

「そ・・・その・・・わたしと・・・」

頬を染め、うつむきながらも手をつなごうと
喉から声をひねり出そうとするところに

「おや？あれは・・・刃さんでは？」

「え！」

「何！どこや？！」

「刃？だれですか？それ」

趙雲の一言により、興味の対象が刃の存在に変わりショックを受けている。

「あ！おつた！くおらああああ」

「待ってくださいよおお」

「孔明も行く」

「行かないのですか？」

張飛は拳を握り叫びながら走っていき、他の皆も後から追うように
ついていった。

関羽はせっかく勇気を振り絞って言おうとしたところを邪魔され、
怒りの

矛先を刃に向けていた。

「どうしよう・・・」

刃はテレビを眺めながら、どうするかを思案していた。そこに

「くおらああああ」

どこからか叫び声が聞こえ、声のした方をみると

「張飛さん！」

「張飛さんやあらへん！昼飯の恨み今ここではらさせてもらつて！」

「お・・・落ち着いてくださいよ」

そこに知らない、女性が一緒にきた。

「？君は？」

「ボクは馬超 孟起つていいいます。」

「僕は、刃でよろしく」

馬超は名前を聞き、聞いた事のない名前に頭をひねった

「あなたは闘士なんですか？」

「えーっとその名で言うのなら・・・」

続けようとしたところで、強い殺気が自分に向けられている事に気づき、

とっさに避ける

もといた場所に青龍偃月刀が通過した。関羽の敵意が自分に向けられて
いることに意味がわからず

「えええ！関羽さん！なんで？」

「うるさい！貴様のせいだ！」

「なにが！??」

わけがわからない、そんな顔が一層、関羽をいらだたせ
体から氣があふれ出ている。

「か・・・関さん落ち着いて！」

「どうなされたのですか？」

「関羽よ、落ち着け」

「え？え？」

孔明や劉備は落ち着かせよと、趙雲は疑問に、馬超はわけがわかっていなかった。混沌とした雰囲気をもたらし、かき混ぜる人物が一人……

「いいぞ関さん！やっただれ……」

「まかせろ！益徳」

張飛が煽り、関羽が青龍偃月刀を強く握り締める。

（あれ、僕なんかしたかな、というか

今日こんな事ばかりあるような……

あれ？なんでだろ目から魂の汗が……）

今日でおきた事を振り返り、一筋の水滴が、そんな事など露知らず今、”関羽対呂布”の闘いが始まる。

関羽の怒り！呂布の戸惑い（後書き）

関羽さんの怒り方があからさますぎな感じが・・・

勝負の行方（前書き）

どうもBLEYZです。呂布と関羽の決着です。
やはり戦闘描写は難しいですね。そして技が中二病・・・
それでも大丈夫という方、楽しんでいただければ大喜びです！
それではどうぞ

勝負の行方

「あの人、大丈夫ですかね・・・」

刃の事を詳しく知らない馬超がつぶやく
その事に、趙雲はすかさず答える。

「大丈夫でしょう。彼の強さは知っていますから」

「そんなに強いんですか？」

その問いに微笑みながら

「私を倒したのですよ？」

「なっ！」

馬超は驚いた。趙雲は特Aクラスの闘士、関羽に引けをとらない実力を
持っている。その趙雲を倒したというのならただならぬ実力だ。

「刃っていったい・・・」

刃などという武将はいない。その疑問に答えるように
続ける。

「彼は”呂布奉先”」

「呂布奉先！？でも死んだはずじゃあ・・・それに呂布は

女の人じゃ・・」

「ええ、彼はその双子の弟です。」

「弟！」

馬超はさらに驚いた。闘士が双子として生まれるなど聞いた事がなかったのだ

「驚くのも無理はないでしょう。私も驚きましたから」

そうつぶやき、対峙している関羽と刃に視線を向けていた。

「覚悟はいいか？刃よ！」

「だめです！」

「いくぞ！」

(なんで〜〜)

会話が成り立たず、刃は心の中で嘆いた。そもそも原因がわからないそんな心のつぶやきをするまに関羽の横薙ぎの一閃が迫る。

「ちい！」

頭を下げ、避ける。それでも関羽は手を休めず隙のない連撃を繰り返す。

「はあああああああ！」

「せやあああああ！」

刃も刀で抜き切り結ぶ、互いの武器が打ち合い火花が散り切りあう速度が徐々に上がっていく
その速度は、最早目にも止まらない速さまで達していた。

「ふっ！」

「はあ！」

ガギヤアアアアアアアン

互いに大きな一撃を放ち、下がる

「やるな！」

「それほどでも、そろそろおw「はあ！」て聞いてない・

・・」

半ば諦めたような表情で刀を振るう。これほどの打ち合い、関羽は怒りではなく、ただ”目の前の強者に勝つ”それだけだった。刃からすれば突拍子もなく始まり、ただ迷惑なだけだった。

「やるしかないか・・・」

刃は早く終わらず、それしか考えておらず

構えを解いた

「なに！」

振りかぶっている時に相手が構えを解いたのに動揺した刀を下ろし、ただ立ち尽くすその行動に関羽のみでなくその闘いを見ていた、劉備達も驚いていた。

「！」

「な！あいつ死ぬつもり？！」

「そらあかんやろ！」

「関さんだめ～～！」

「・・・・・・」

馬超も劉備も孔明も、煽った張飛もその行為に呆氣に取られていたが趙雲だけが静かに見守っていた。

” なにかするのではないか” と

（止められん！）

関羽も殺す気はない為、止めようとするも振り下ろされた刃は止める事はできない。そして

ブオン

彼に向かって振り下ろされた。

しかし、関羽は斬った感触はなく、後ろから刀を突きつけられた。

” 月影流歩法術 朧月”

薄い氣を体に纏い、その場で特殊な歩法で移動し、そこに残像を残す。

構えを解き、関羽が振りかぶっている時、すでにそこにはあるのは幻背後に回っていた。

「僕の勝ちでよろしいですか？」

「・・・ああ、私の負けだ・・・」

二人の闘いを見ていた馬超は目を見開いた。
成都学園では最強と目される関羽に勝ったのだから

「すごい・・・」

闘い自体も自分ではまだまだ弱い、そう実感させられる。
劉備達もまさか、関羽が負けるとは予想もしていなかった
ただ一人を除いて、

「すごいです・・・関さんに勝つなんて・・・」

「うちも・・・いまだに信じられへん・・・」

「まさか・・・関羽が・・・」

劉備や張飛、孔明は鳩が豆鉄砲をくらったような顔をして
二人を見つめていた
しかし趙雲は

「やはり・・・やりますね・・・」

目を瞑ったままつぶやいき、二人を見つめていた。

呂布の勝利で幕をとじた。

勝負の行方（後書き）

いかがでしょうか？

もうちょつと引つ張りたいのですがネタが・・・

やっぱりお約束的な展開を入れるべきでしょうか？

扉の先でムッフ、偶然でムッフ

変態発言すみません。お約束を入れるべきかは検討しておきます。

それではまた次回、感想お待ちしております。

朝の騒ぎ（前書き）

どうも、BLEYZです。

今回はネタ回です。ほのぼのとしたところも書いてみました。

朝の騒ぎ

「待て！貴様〜！」

（なんでこんな事に）

ある朝、それは突然始まった。

「ふあ〜よく寝た〜」

部屋の一室、目覚める声が聞こえた。

あの闘いの後、事情を説明し、成都学園の寮で使われていない部屋を使わせてもらっていた。

「はあ〜よかった。なんとかなくて、一時はどうなるかと・・・」

ホッとした表情で立ち上がり、手洗い場に行った。
のそのそと歩いていき、扉を開けた先に劉備がいた

一糸纏わぬ姿で

一瞬、理解し切れていない二人
だが

「きゃあああああああああああああ」

劉備の叫び声が響いた

「すっ！すみません！」

扉を閉めようとするが後ろから強烈な気配を感じ
振り向くそこに

鬼の形相で青龍偃月刀を構える関羽がいた

そして今に至る……

「はあ……なんとか撒いた……」

関羽から振り切って物陰に隠れていた

なぜこんな？と考えていると朝のできごとを思いだし顔を赤くしていた。

「いや僕も悪かったけど・・・」

男に生まれたままの姿を見られたので謝ってすむものではない事はわかるが・・・

「いや偃月刀はないでしょ・・・」

こんな感じでつぶやいていると

「あ！おったで関さん！」

「ちよっ！」

隠れていたところに張飛があっさりとそれをバラしてしまった。

「張飛さんなんで?!」

「いやゝ関さんが見つけたらうまいもん食わしたるゆうてなゝ」

「それだけ！」

その事実にはショックを受けた。そんなやり取りをしているうちに鋭い目つきがさらに鋭くなったて走ってくる関羽の姿が

「ええい！三十六計逃げるにしかず！」

「あ！まちいや！」

「逃がすな益徳！」

それでもするりと包囲を抜け出し走る

「ハアハア・・・見失ってもうた・・・」

「フウ・・・逃げ足も速いな・・・」

刃に逃げられ、息をみだす。それゆえに関羽の怒りはさらに増した・・・

「おのれ～～刃～～～～～～！！」

あまりの怒りに、殺気のみならず氣も漏れ始めた・・・

「落ち着け関さん！」

「うるさい！落ち着いてなどいらるか！」

（玄德の肌を男に見られただなんて・・・
絶対にゆるさん！）

そうしてどこにいるかを思索していると

「孔明も手伝おう」

蜀の軍師、諸葛亮 孔明が乗り出して来た

「孔明・・・」

「玄徳の裸を見たの、許さない・・・」

表情に変化がなくても、かなりご立腹なのは
明らかだった。

「協力するというのは？」

「うむ」

敵対している二人が手を合わせる瞬間だった。

「ハア・・・ハア・・・なんとか・・・」

二人を撒き、休憩に腰をつける。あまりの理不尽さに

文句を言いたくなるが関羽のあまりの形相になにも言い返せない
それどころか話さえも聞いてくれない

「本当にどうするか・・・」

選択肢1、謝る

選択肢2、逃げる

選択肢3、迎え撃つ

（いや2は現在進行形だし・・・3はないかな
というよりも1が正しいだろう・・・）

そうして謝りにもどると

「みつけたぞ！」

（逃げるんじゃない！戦略的撤退だ！）

結局、選択肢2を選んでしまい、逃げるが・・・

「ほら！こつちや！」

「何！」

先を読んでいたかのように前方に待ち構える

このような布陣ができるのは、怒りに任せて追ってくる
関羽にできるとは考えられず

（もしかして孔明さんが？・・・）

前方より駆けてくる張飛を飛んでかわしたが

「予想どおり！」

「え！」

待つてましたとばかりに構えて立っている馬超がいた。

（ここまで読んでいた！）

「覚悟してよ！」

その拳を避け、通り抜けようとするがその先に

「おまちしておりました。」

刀を構えて立つ趙雲の姿が

「はあ！」

「くっ！」

立ち止まり、刀の一閃を避けるが後ろから

「はあああああああ！」

「ぐえ！」

関羽の蹴りで吹き飛ばされた。壁に激突し倒れる・
気がつくと周りに囲まれ

「え〜と・・・話を」

「問答・・・」

「無用！」

その日、成都学園に男性の叫び声が響いた。
刃は関羽にこつてりと絞られ、その後に来た孔明に
さらに絞りカスにされ、魂の抜け殻にされた。

朝の騒ぎ（後書き）

いかがでしたか？

この小説の関羽は怒りっぽい気がします。

それでも楽しんでいただければ嬉しいです。

感想おまちしています。

それではまた次回

朝の手合わせ（前書き）

こんにちは、BLEYZです。
真面目な感じで進みます。
それではどうぞ

朝の手合わせ

「くあゝ．．あれ？まだ早いな．．」

朝、刃はいつもより早く目が覚め、布団から立ち上がり

「鍛錬でもするか」

そうつぶやくと着替えをすませ、刀を持ち外に向かって歩き出した。

「さて、鍛錬を始めましょうか」

趙雲は早めの起床をすまし、刀をもって広間にいったそこに

「おや？．．．．」

そこに刃がいた。刀を手に一心不乱に刀を振るっている。その一連の動作は最早、舞に近いものがある。しかし、美しい動きにも実践的なものがあり彼がどれほど強いのかを感じた。

その動きに趙雲は見惚れていた。

「あーおはようございます」

刃は趙雲に気づき、動きを止める

「おはようございます。お早いんですね」

「いえ、ちょっと早くに目が覚めて」

そうですかと答え趙雲は

「私と手合わせをしませんか？」

「準備はよろしいですか？」

「ええ」

それ以上の言葉は要らず、構えながら向き合う。

「「はあ！」」

ほぼ同時に動いた。斬り合い二人はそのすべてをかわし、受け流す隙を作っては攻め、そのすべてを受け流される。振るう速さは徐々に増していき、打ち合うたびに火花が、受け流すたびに透き通った残響音が響く

「せい！」

「ふ！」

互いに距離をとる。

「さすがですね」

「あなたこそ」

そして、走り出し、趙雲は神速の一閃を放った。刃は反応し、下がるも隙のない連撃。

「くっ！」

「そこ！」

一瞬の隙、趙雲は突きを放った。刃は……

趙雲は確実に捉えた突きを放った

（これで！）

しかし、思いもよらないことになる

シャキン！

（な！）

刃はその突きを自分の持っていた鞘で受け止めた。
そして、綺麗に納刀されたのだ

「はあ！」

「！」

そして刀を奪われ、切っ先を突きつけられる

「ハア・・・ハア・・・僕の勝ちですね・・・」

「・・・フウ・・・ええ、負けました・・・」

「お強いんですね・まさか、あんな対処法であの突きかわすなんて」

「いえ、偶然です。その証拠に息がすごく乱れていたでしょう?。」

当然、毎回あのようにできるはずがない。そのような芸当はかなりの集中力が必要、刃も内心驚いていた。

「謙遜をなさらずに誇って良い強さですよ」

「いえ、僕はまだまだ」

そんな会話をしていると

「ひゃー!」

「え？」

劉備と目があってしまった。あの一件で何かとギクシャクしていたのだ。

「え・・・えと・・・その、お・・・おはよう・・・ございます・

」

「はははい！おおはようございます！」

このままではいけない、そう感じた刃は

「すみませんでした！」

「え！」

「私の不注意で粗相をおかしてしまい、
本当にすみませんでした！」

突然、頭をさげ、劉備は驚いた。

「い！いえ、大丈夫ですよ。だから、頭を上げてくださ
い」

「いえ！それでm「わたしがいいといってるんですから」

」

にっこりと笑い、手を伸ばし

「ねっ！」

「はい！」

その手を握った。

「よかったですね、仲直りできて」

「はい」

朝ごはんを食べるため三人で歩き出す。

「今日の予定にお手伝いできる事はありませんか？
このまま、なにもしないのは悪いですし・・・」

「今日の予定？・・・あ！」

思い出したかのように相槌を打ち

「今日は孫策さん達と山に行く予定でした！」

「山？」

「はい！」

「その・・・そういった事は事前に言うべきでは？・・・」

「そうなんですけど・・・昨日は・・・」

彼女はもじもじして答えた

「あ・・・すみません」

「いえ！いいんです！」

理由を納得し

「わかりました。私が荷物もちをしましょう」

そう言って、朝食を食べるため、寮へと向かっていった。

朝の手合わせ（後書き）

いかがでしたか？

ちなみに作者は孟優が好きです！

この姉妹絶対だすのでおねがいます。

この小説に関する感想お待ちしています。

それではまた次回

いざ、キャンプへ（前書き）

どうも、BLEYZです。

もう少しほのぼのが続きます。

いざ、キャンプへ

「あの～大丈夫ですか？・・・」

「はい・・・だ・・・大丈夫です」

孫策達と山に行くための荷物持ちをかって出たのだが
予想以上の重さに

「こ・・・こんなに何が入ってるんですか？」

「私は本を20冊分」

「うちは弁当や！」

山に行くのになぜ本を20冊も？とか弁当にしては
なぜこんなにも重い？など疑問が尽きないがそれより・・・

「関羽さん？これは・・・」

「私の荷物だが？・・・」

明らかに鉄アレイしか入ってなさそうな荷物がたくさん

「孔明さん？・・・」

「孔明の荷物・・・」

関羽同様、鉄アレイしか入っていない荷物

どうやら、昨日の事を根に持っているらしい……

「関羽さん？軍師殿？こういった事はやめたほうがよろしいのでは？」

「だが！」

「先の件は不可抗力、お互いに謝り、許しを得たのなら、あなたがたがその様なことをする必要がないのでは？」

「「うつ……」」

趙雲の正論に二人はグウの音もでない。そして劉備も

「そうです。関さん、孔ちゃん やめてあげてください」

「……わかった……」

「玄德がそう言うのなら……」

渋々といった顔で片付ける。刃はため息をつき

「すみません。劉備さん、趙雲さん」

「いえ、非があるのは彼らですから」

「気にしないでください」

「にしても、関さんも孔明も相変わらずやなあ」

準備を終え、孫策達と合流するため、待ち合わせ場所に移動を開始した。

「キャンプ楽しみだね！」

「はしゃぐな、伯符」

バス停の前で待ち合わせる孫策と周瑜、呂蒙そして

「いいのか？俺まで」

樂就もそのキャンプに参加していた。

「何言ってるんの樂ちゃん！大勢で行ったほうが楽しいっしょ！」

「そうですよ。僕も含めて男手がいた方が

何かと便利だと思えますし」

「だそうだ、気にするな。しかし
なんで私まで・・・」

一人、そう心配そうにうつむく。そこを孫策は見逃さず

「もしかして？左慈っちの事気になってる？」

「なっ！／＼／」

顔を真っ赤にして驚く。孫策はニヤニヤしながら

「やっぱりそうなんだ」

「ちっ・ちがう！／＼／」

「隠さなくてもいいのに」

孫策が呂蒙をからかっていると、呂蒙が拳を握って

「やめるバカ！」

「にゃ！」

頭を強く殴った。孫策が泣きながら

「バカって言った〜！バカって言った方が
バカなんだからね〜！」

「うるさい！バカ！」

「またバカって言った〜！」

そんな子供の喧嘩をしていると

「孫策さ〜ん！」

声が聞こえてきた。

「待ち合わせの場所はどこですか？」

「この先のバス停のほうですよ」

そんな会話をしていると、バス停で喧嘩している孫策と
呂蒙が、その後ろでため息混じりに話をしている周瑜と・・・
だれ？

そんな事を考えていると劉備が

「孫策さ〜ん！」

劉備が声をかけ、こちらに気づき

「あ！劉ちゃん！」

こちらに駆け寄ってきた。そこに荷物を持っている男性をみて

「刃ちゃん！」

「刃ちゃん？」

「あれ？刃さんなんでここに？」

「いや〜実は電車が通ってなくて・・・」

頭をかきながら答える。

「もしかして土砂崩れの？」

「ええ、それで今は成都の方々にお世話になっているんです」

「それは災難ですね」

「本当に」

周瑜と会話をしていると大柄な男性が

「お前は誰だ？刃と呼ばれていたが・・・」

「えつと・・・僕は・・・」

呂布を名のるか考えていると

「そいつは呂奉先だ」

呂蒙が補足した。

「呂布奉先だと！？だが」

「いいたいことはわかる。そいつは洛陽にいた
呂布の双子の弟だ」

樂就は驚き、刃に向き直り

「言われて見れば髪の色とか似ているな・・・」

「本当は長居するつもりではなかったんですが
交通が・・・」

「あつたな・・・土砂崩れ・・・」

「ええ」

その後も、バスが来るまでがやがやと騒いでいた。

いざ、キャンプへ（後書き）

いかがですか？

すこし笑いを狙いたいのですが、ネタが・・・

感想お待ちしております。

それではまた次回

キャンプの夜（前書き）

ほのぼのしています。シリアスもそろそろ展開していく予定です。
ではどうぞ

キャンプの夜

「みなさん、お久しぶりですわ」

「久しぶり」

バスから降りた先にいたのは、孫権、左慈がバス停で出迎えていた。

「ひっさしぶり！仲謀！左っちゃん！」

「どなたですか？・・・」

一人知らない刃は問う。孫権は向き直り

「お初にお目にかかります。孫仲謀と申します」

「あ・・・えつと・・・僕は・・・いろいろ事情がありますが
名は呂布奉先と申します。」

お互い丁寧に挨拶し、もう一人のツインテールの娘も

「私は左慈元放です。よろしく」

「よろしく」

「挨拶も終わっただからさ！早くキャンプやる！」

「わかりましたわ。伯符お姉さま」

「うん。いいー。」

「それじゃあ、しゅっぱーっ！」

孫権についていき、キャンプの場所まで移動する。

「それじゃあ、これを引っ張って」

「はい」

「樂就さんはこっちを」

「わかった」

男性陣は手際よくテントを張っていく、一方女性陣は

「はあ！」 「ふっ！」

刀で木を切り倒し、さらに細切れにして薪にする関羽と趙雲

「ふんふんふん」

鼻歌を歌いながら本を読む劉備

「これここでいいかな？」

「すこしバランスが悪いですわよ。伯符お姉さま」

バーベキューセットの用意をする孫策と孫権
テキパキと作業が進む。

その夜

ジュウウウウウウ

「おいし〜〜！」

「伯符！もっとゆっくり食べろよ」

皆で焼肉パーティをしていた。それぞれ食べている。

「刃様、すこしよろしいか？」

孫権が刃に問いかけた。

「はい？なんですか？」

「刃様はなぜここに？」

少しうつむき暗い表情で

「姉さんが死んだって聞いて・・・」

「あ！も・・・申し訳ございませんですわ」

聞いてはいけない内容と知り、頭を下げた。

「いえ、詳しい事も聞けましたし、大丈夫です。」

「でも・・・」

それでもと言いたげな顔をしていたが

「本当に大丈夫ですよ。」心配なく

「そうですか・・・」

そんな会話をしていると

「刃ちゃん」

「はい？」

孫策が来て

「あたしと勝負しよ！」

拳を向けて言い放った。他の皆も

「お！面白そうやな」

「ふむ、確かに気になりますね・・・」

「俺も見てみたいな」

などと盛り上がり始めた。刃も断る理由もないため

「わかりました」

孫策はグローブを着け、刃は刀を構える。

「準備はいい？」

「ええ、どうぞ」

刃は氣を放出し

” 月影流威圧術 影殺し ”

しかし、孫策は

「いつくよー！」

大量の氣を放出し、影殺しをかき消した。

（な！）

無論、狙ってやった事ではないだろう。しかし、あの技は氣を切り裂きながら相手に届かせる技、それさえもかき消す氣量に刃は驚いた。

「はあああああ！」

「くっ！」

孫策の氣を纏いながらのラッシュ、右左からの殴打
それらを、避け、受け流す。

「でえやああああ」

「そこ！」

ピタッ

孫策の大振りな一撃を振るつ前に納刀した刀の先で止める

「えっ！」

「いくぞ！」

孫策の腹に掌底を打ち込む

” 月影流奥義 影封じ ”

孫策は身悶えたが

「あれ？痛くない」

何ともなかったが・・

「はああ・・あれ？」

氣を纏っていなかった。それどころか

「氣がつかえない！なんで！」

なぜだか困惑している孫策に

” 月影流抜刀術 三日月 影払い ”

大きな真空波が孫策にぶつかり

「うわああああ」

吹き飛ばされた。刃は近づいていき

「大丈夫ですか？」

「いたた・・・やられちゃった」

手を差し出し、起こす。他の皆も近づいてきて

「大丈夫？伯符！」

「大丈夫だよ公瑾、負けちゃったけど」

「そう、よかった」

ホッと撫で下ろしている周瑜

「ところで刃、今の技は？」

呂蒙の質問に皆が刃を見る

「孫策は氣を使えないと言っていたが・・・」

樂就が疑問を漏らした。皆もわからないといった様子

「すみません。あれは私の流派の”奥義”です。
詳しい事を教えるわけには・・・」

「そうですか・・・残念です・・・」

趙雲はざんねんな顔、呂蒙は

「孫策はずっとこのままなのか？」

「いえ、時間が経てば使えるはずですが
一時的に封じるものですから」

そう説明する。呉の面々は一様に落ち着いたようだ。

「しかし、氣を封じる技か・・・」

「ええ、簡単にできるものではないでしょう」

関羽と趙雲は冷静に分析していた。

「そんな事よりも運動したらお腹すいた〜
まだあまってない？」

「いえ、まだありますわ、お姉さま」

そういつて余っていた肉や野菜を差し出した。

「わっい」

そうして、今日の夜は更けていった

キャンプの夜（後書き）

いかがですか？

南蛮高校をどうだすかで思案しています。
感想お待ちしております。ではまた次回

続く不運（前書き）

どうも、更新遅れました。すみません。
今回やっと登場かな？
それではどうぞ

続く不運

「ふっ！ はっ！」

刃は朝の鍛錬をしていた。たとえキャンプに来ていたとしても、欠かす事はできない。

「せい！ やっ！」

「精がでてるな」

「呂蒙さん」

呂蒙が近づきながら挨拶をし、答える

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

そう言い、鍛錬に集中する

「ずいぶん早く目が覚めたな・・・」

呂蒙は起き上がり、空を見る。雲がなくさわやかな朝と言える

「すこし散歩をするか・・・」

そうつぶやき、歩きはじめる。すると何処から
空気を切り裂く音が聞こえる。

「なんの音だ？・・・」

音の聞こえるところに行くと、そこに

刃がいた。鍛錬をしている。しかし、ただの鍛錬が
人を魅了する何かがあり、見ほれていた。

剣士と拳士、武器を持つのと持たないもので強さを見極めるには
実際に戦うしかない。しかし、刃の鍛錬は強いと
思わざるをえない無骨な美しさがあった。

呂蒙はハッとして声をかける

「精がでているな」

「あははははは それっ！」

「きゃっ！もうお姉さま！」

「冷たいです！孫策さん」

「あはは」

孫策、劉備、孫権、左慈の四人は川で遊んでいる。
その際、孫策が二人に水をかけたのだ。

「仕返しです！それ」

「行きますわよ。お姉さま！」

「うわ！」

「楽しそうですね」

「そうだな」

その様子を、周瑜と樂就が見ていた。

「ただ暗くなる前に片付けないと」

「そうだな」

そうして片付けの作業をしている。

「どうしたのですか？ 関羽さん」

「い・・・いや・・・／＼」

四人で遊ぶ様子を羨ましそうに眺めている

「一緒に遊びたいのでしたら行けばよろしいのでは？」

「そ・・・そういうわけには・・・」

なにやらもじもじとしたまま眺めていた。

（ああ・・・玄德・・・ハア／＼／）

脳内での状況をシュミレートしているようだ
その様子に趙雲は

「ハア・・・」

ため息を漏らした。

「なあ、孔明？」

「なんだ？」

「玄德のどこ、いかんでええの？」

張飛はお菓子を食べながら、孔明は本を読みながら

「いい、玄德が楽しそうだから」

「いつつもけんかして取り合ってたやないか？」

孔明は本から視線をはずし、

「楽しい雰囲気邪魔したくない」

「そか。いろいろ考えてるんやな」

ぱりぱりとお菓子を食べながら答え、孔明は本に視線を落とし

「当然だ」

そう言い放った。

「さあ、帰りましょう。お送りいたしますわ」

「うん！楽しかった！」

「ふふ、私もですわ。お姉さま」

バス停まで戻るため、森を歩く。すこし歩いたところに古い橋がある

「皆さん。気をつけてくださいませ」

一人一人渡っていくが・・・

ギシギシ ギシギシ ギシギシ

「ちよっ！なんか怖いんですけど！」

本を20冊分に自分の荷物をもっていれば、当たり前だ。
古くなった橋は今にも切れそうだ・・・

ギシギシ ギシギシ ブチッ！

「え！」

橋は中心で引きちぎれ、刃は深い川に落ちた。

バチャーーーン

「「「刃ーーーー！」」」

重い荷物もあり浮いてこない

「そ・・・そんな・・・」

「モガモガ」

刃は水に流されながら溺れていく。しかし、刀は確り握っている。

（ウオォー）

持っている荷物の肩部を切り、抜けだす。

「ぷはぁ！」

水面に顔を出す。川の先は・・・

「うそだろーーーー！」

滝だった……

「うわああああああ」

そして放り出された。

「どうしよう？公瑾！」

「おお落ち着け伯符」

みな、想定外のこと戸惑っていた。中でも劉備は

「わ・・私が本なんて持ってこなければ……」

相当落ち込んでいた。しかし関羽や趙雲は

がない」

「心配するな玄德、あいつがこの程度で死ぬはず

「ええ、ですから信じて待ちましょう」

「関さん・・・子ーさん・・・」

劉備をなだめる。

「せやけど、どうするんや？さすがに帰ることは
できんやろ？」

「それでしたら、わたくしの家に来てください。
明日、皆で探しましょう」

「わかった」

孫権の提案で、明日探す事になった・・・

「いっつつつつ．．．どこだ？ここ」

川沿いに流れ着き、あたりを見回すが森しか見えない。

「取り合えず、歩いてみるか．．．」

そして歩き出した。すると

「なんだ？この建物．．．」

そこには”学校”らしき建物があったそこは．．．

”南蛮高校”

続く不運（後書き）

いかがですか？

あからさますぎですよ？それでも出したいんです！孟姉妹！
それではまた次回

暗躍の影（前書き）

どうも、BLEYZです。

そろそろシリ阿斯突入です。

孟姉妹出せましたがキャラはこんな感じですかね？
それではどうぞ

暗躍の影

「なん・・・ばん・・・高校？聞いた事ないな・・・」

廃墟のような建物に戸惑いながらも

「ハッ・・・ハックション！」

風をしのぐ為、中に入っていた。

「おい・・・」

「なんだ？・・・」

褐色肌の女性が、色白な女性に話をかけた。

「なんか来たぞ・・・馬鹿野郎」

「ああ、そうだな どうする？」

そう答えると、褐色肌の女性はニヤリと笑い

「んなもん・・・やる気ならやるだけさ、馬鹿野郎」

そう言い立ち上がり、出口に向かう、

「ああ」

色白の女性も続いていく

「誰かいませんか？」

自分の声だけが響き、なにも聞こえない。
無人と判断しようとした時、前から気配が近づいてくる。

「お前は誰だ？馬鹿野郎」

褐色肌の女性と色白の女性が近づいてきた。

「え〜と、刃と申します。あなた方は？」

「南蛮高校二年、孟獲」

「同じく、南蛮高校二年、孟優」

名乗りが終わると二人は殺気を強め、

「さて、いくぞ！馬鹿野郎」

「覚悟しろ・・・」

「え！？」

いきなり孟獲がチュワンを投げる。刃はそれを刀で弾くが目の前に現れた孟優が斬りつける。それを寸前でかわす。

「いきなり何を！」

「お前は私達の首を取りに来たんだろう？」

「最近になって、チョコチョコ雑魚をよこしやがって馬鹿野郎！」

「??」

訳がわからないといった表情に二人は攻撃をやめ、

「本当に違うのか？」

「・・・僕は川に流されてここにきただけですよ？」

「なんだ・・・違うのかよ・・・馬鹿野郎」

ため息混じりにつぶやいた。刃はその様子に

「何かあつたんですか？」

「最近このあたりに訳のわかんねえ連中がうるついてんだよ馬鹿野郎」

「それだけならまだしもあたし達を攻撃してきたんだ。」

刃は真剣な表情で続けた。

「なんでそいつらはここに？」

「さあね、あたしらが知ることじゃないよ」

「あゝーイライラするぜ！馬鹿野郎」

おもむろに壁を殴る。すると突然、周りが殺気に囲まれた

「「「っ！」」」

二人もそれを感じて構える。

「本当にきやがったよ・・・馬鹿野郎」

「面倒だ・・・」

「なるほど、毎日これではイライラするのも無理はないですね。」

いきなり窓が割れて、一人が飛び込んできた。

「オラ！」

孟獲はすかさず殴り飛ばす。男はそのまま外に飛んでいった。それでも周りから続々と湧いて出る。

「はあ！」

孟優は攻撃をかわし、切り裂く、近づいた男は上半身が飛んだ。孟優は手を休めず続けて切り裂く、しかし

「ちっ！」

後ろから近づいた男に腕をつかまれ、その隙を逃さないように孟優に近づく男達

「はあああああああ」

” 月影流乱撃術 三日月 影乱れ ”

周りにいた敵をすべて蹴散らす、飛びかう血を一滴も浴びることなく孟優に近づいていき、

「はっ！」

掴んでいた男を切り裂いた。

「大丈夫ですか？」

「問題ない・・・」

「油断しすぎだぜ！馬鹿野郎」

孟獲も合流し、一旦距離をとる、そして

” 月影流抜刀術 三日月 影払い ”

「「「「うああああああああ「「「「

廊下にいた大量の敵がこの一撃で血の海と化した。
あまりの強さに敵は逃げ出した。

「後を追います！」

「ちょ！待てよ馬鹿野郎」

「ちっ！」

そういつて三人は逃げた敵を追う

「まだ見つからないのか？・・・」

「はい、もうしばらくお待ちを・・・」

ある男は、祭壇の上にある杯を見つめながら

「あとは”あれ”さえあれば、究極の力が・・・」

「その前に封印を解きませんか・・・」

その男は膝をついたまま答える。

「そうだったな・・・その刀を使えるものは？」

「いえ、まだ扱えるものがありません
今しばらくお待ちを・・・」

「待ち遠しいな・・・この力が手に入った時
まずは許昌に復讐してやる・・・」

「はい・・・もうすぐその時です。」

”
袁紹樣
”

暗躍の影（後書き）

いかがでしたか？

アニメに袁紹ってでたっけ？って勢いで出しました。

オリキャラにも作風を壊してしまいそう出し、武将も思いつかばないので

こんな小説でも楽しんでいただければ嬉しいです。

ではまた次回、感想お待ちしております。

影との闘い 真相 前編（前書き）

シリアスで進みま・シリアスかな？この内容
ちよつと残酷な表記を増やしてみました。それでも
良いという方、楽しんでください
それではどうぞ

影との闘い 真相 前編

「なんでこんな面倒に付き合っただ？」

「え？」

走りながら孟優は口にした。刃は

「よくわからないけど・・・いやな予感がしてね・・・」

「いやな予感？」

「ええ」

「お喋りはここまでだ、馬鹿野郎」

孟獲の指摘で喋るのをやめ、目の前を見る。
何かの洞窟の奥に入っていた。

「ここみたいだな・・・馬鹿野郎」

「ああ、さつさと終わらすか・・・」

孟獲、孟優立ち上がり洞窟へと走っていく。

「ちょ！待ってください！」

刃もその後を追う

「袁紹様」

袁紹と呼ばれた男は振り向き

「どうした？」

「南蛮に仕向けた兵が手傷を負って帰ってきました」

「それがどうした？」

興味がないといった素振りで杯に目を移すが

「兵のほとんどが死に残りわずかになりました。」

その報告に袁紹は驚いた様に振り向く

「なんだと！なにがあつた？」

「孟姉妹以外に別の刀を持った男がいると報告が・・・」

「男だと？」

「はい」

「袁紹様！」

一人の男が慌てたように入ってきた。

「孟姉妹と刀を持った男が来て、暴れています！」

「何！」

（来たか・・・）

「かかって来いよ！馬鹿野郎！」

孟獲が倒した敵の山を作って挑発する

「失せろ・・・」

孟優も着々と死体の山を作っていく
刃はその様子に

「・・・・・・・・・・」

口を開けたまま絶句していた

「なんだよ この腰抜けどもは、馬鹿野郎」

「つまらんな・・・」

周りの敵は戦意喪失、地獄絵図の光景だった・・・

（やりすぎのような気が・・・！）

気配は無いが明らかに孟獲を狙った攻撃
刃は走り、孟獲に迫る攻撃を

「せい！」

刀で弾く、孟獲も武器が飛んできた方に振り向くそこに

「貴様ら・・・お遊びが過ぎたようだな・・・」

一人の男が立っていた。

「お前か・・・この辺りをうるちよろしているヤツは・・・」

「うっとうしいんだよ！馬鹿野郎」

「なぜ、この辺りに？なにかあるのですか？」

袁紹はその問いに目を細めた

「なぜこのようなことを？」

「復讐のためだ・・・」

「復讐？」

「そう」

袁紹は怒りを込めた表情で語る

「すべては曹操に復讐するための力を得るためにあるものの亡き骸を捜しているのだ・・・」

「ある者の亡き骸？・・・」

刃はいやな予感を感じた。その”ある者”がどうして引っ掛かっていた。そして、その”嫌な予感”は当たる事となる・・・

「そう・・・」 呂布奉先”の亡き骸だ・・・」

「っ！」

刃は姉の亡き骸を利用しようとする袁紹に怒りが芽生えはじめる
そんな事を知らない袁紹は続ける

「呂布奉先の亡き骸で魂を呼び寄せ

その魂をこの地に眠る鬼の力の供物として
ささげる事でその力を使役する・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「鬼の力？」

「何だそれは？馬鹿野郎」

孟姉妹はわからないといった表情、刃はその力がどんなもの等よりも
袁紹に対する怒りが膨れ上がっている

「ふん・それは「もういい！」っ！」

刃は袁紹に切りかかる。袁紹は目に追えず腕を切り飛ばされた。

「ぐあああああああああああ！！！」

「袁紹！貴様が何をしようが俺には関係ない！

だが・姉さんを利用しようと言っのなら容赦しない

」！

刃は刀を振るう

「文醜！」

「はっ！」

即座に文醜が前に出る。巨大な剣を刃に振るう

「邪魔だ！」

刃が手に持っていた刀が淡い光を放っていた。

” 月影流奥義 月光 満月 ”

氣を纏った刀は巨大な剣ごと文醜を斬った
一瞬で絶命し、断末魔さえ聞こえない

「はあああああ！」

「ひっ！」

「袁紹様！」

剣を持った男が袁紹を引き寄せ、一閃を避ける

「ご無事ですか？」

「あ・・ああ・・助かった顔良」

刃は構うことなく袁紹に刀を振り抜く

” 月影流乱撃術 三日月 影乱れ ”

無数の真空波、そのすべてを剣でかわす
その隙に刃は顔良との距離を一気に縮め、刀を振ろうとしたが

バキーーーーーン！

「つしまった！」

氣を纏い続けた刀は刃の氣に絶えられず刀が碎け散った。
顔良はチャンスとばかりに詰め寄り剣を振るう

「はぁ！」

「ちい！」

刃はひたすら避け続ける。横の一閃をかわし、斜めの切り上げを
後ろに飛んでかわす

「くそ！」

「残念だったな・・・これで終わりだ！」

（くそ！）

刃はここで刀を避けようとする。すると突然、袁紹の後ろ
祭壇の上に置かれた一本の刀が青黒く輝いた

「くっくっく！」

それには袁紹、顔良も声を上げ驚いた。

「何だと！まさか・・・」

「このような青年が・・・」

その刀が突然、刃に向かって飛んでいく
刃はなんだかよくわからないものに惹かれてその刀に手を伸ばす

「この刀は・・・」

そして両手で持ち一気に引き抜いた。

シャイイイイイ

透き通った残響音、煌めく白い刀身、影のような漆黒の鞘と柄
そして刀身の腹には

”嵐月”と刻まれていた

影との闘い 真相 前編（後書き）

いかがでしたか？

なにやらご都合全開な気がしてきました。

なにやらアニメで顔良と文醜はたようです・・・すみません！これはちよつとした原作ブレイクでしょうか？

こんな小説でも楽しんでいただければ嬉しいです。

ではまた次回

影との闘い 新たな力 後編（前書き）

どうも、BLEYZです。

なにやら今回もご都合全開です。そして短く感じます

それでも良いという方、楽しんでいただければ嬉しいです。
ではどうぞ

影との闘い 新たなる力 後編

「なんだ・・・この刀・・・」

手に持つそれは青黒く輝きながらも、白く透き通った刀身
漆黒の鞘と柄

異様な力を感じさせるそれは”妖刀”だった

「いけるな・・・」

刃はニヤリと笑い、斬撃を繰り出す。

（！・・・手に馴染む・・・）

その感触に驚きながらも攻撃の手を休めない

「氣を全力で使っても壊れなさそうだ！」

刃は最大に氣を乗せた一撃を放つ

” 月影流刺突術 月割れ 影落とし ”

刀を鞘に納刀し、地面に垂直に突き落とす
周りに亀裂が走り地面が隆起した。

「うわぁ！」 「ぐう！」

二人は吹き飛ばされ、転げ飛ばされた。

「袁紹様……」

「ああ……一旦退いたほうがいいな……」

手負いながらも、二人は煙のように消えうせた。

「おい……大丈夫か？……」

「禍々しい刀だな……馬鹿野郎……」

二人は刃が持つている刀に警戒していた。独りでに動き青黒い氣のようなものが見え、構えている

「ええ……何ともないですが……何というか
しつくり来るんです……長年愛用していたかのような」

刀を何度も握り、確認する。それでも手に馴染む感触がある
刃は刀を納め

「とりあえず、あいつ等は消えたみたいですし戻りましょ
う」

「ああ・・・そうだな・・・」

「つかれたな・・・馬鹿野郎」

ぼやきながら学校に戻る

「袁紹様・・・刀が・・・」

「あいつを選んだなら利用するしか手はないだろう・・・」

袁紹が杯を持ったまま顔良につぶやく

「なれば先に・・・」

「ああ、先に呂布の亡き骸を見つける・・・でなければ封印は解かれない・・・」

「強い魂を持ったものならば呂布ではなくても良いのでは・・・」

顔良は疑問を言う

「確かに供物にするならばそれでもいいだろう・・・しかし、呂布は鬼神とよばれた存在・・・その魂は龍にも匹敵するほどの強さを秘めている・・・」

「それほどの強さを秘めた魂でなくてはならないのですか？」

「そうだ・・・出なければ天下を取ることなどできん・・・」

袁紹は顔良に語り終えると杯を置き

「早く呂布の亡き骸を探さなければ・・・」

「ならば袁紹様・・・成都の党首の魂をささげてみては？」

袁紹は目を見開き、顔良に聞き返した

「それはどうということだ？」

「龍に匹敵する魂が必要なのであれば龍そのものを
捧げてみては？成都の党首である劉備は
周りの足を引っ張ってばかりです・・・」

その考えに納得した袁紹は

「なるほど・・・なれば劉備を捉えよ・・・
殺してしまってもかまわん！」

「御意！」

劉備に危機が迫っていた。

「あ！そうだ、そういえば・・・」

「あん？」

刃は思い出したかのように問い

「成都に帰るにはどうすればいい?・・・」

「はあ?・・・」

突然の質問に二人は口を開けた。

影との闘い 新たな力 後編（後書き）

いかがですか？

なにやら技がいつぱい増えていく・・・

そしてやはり短いです。読んでいただけの方、楽しんでいただければ嬉しいです。

それではまた次回 感想お持ちしています。

命がけの鬼ごっこ(前書き)

どうもBLEYZです。

すこしネタになってます。

明日から4日間更新ができません。作者の事情です。
展開を考えていますのでお楽しみに
それではどうぞ

命がけの鬼ごっこ

「なんか可笑しいことになってきたな・・・馬鹿野郎」

「本当にな・・・それに迷子の面倒もみないといけないとは」

「す・・・すみません・・・」

刃は自分がここに来た理由を話し、帰路を案内されていた。やるせない表情のまま歩いていった。

「道を教えたつてのになんで戻ってきたんだか・・・」

「まったくだ！ 右に向かっていったのになんで左から戻ってくるんだ！馬鹿野郎」

「・・・本当に・・・申し訳ない・・・」

教えられてもたどり着けないのは方向音痴の基本だろう。うつむきながら頭を抱え歩く

「とりあえず、案内してやるから・・・」

「さっさと帰れよ、馬鹿野郎」

「はい・・・」

「刃さん見つかりましたか？」

「ううん、まだ見つからない・・・」

「玄德、別の場所を探そう」

その後、劉備達は刃を探しに滝の下を探していた。
しかし、いつこうに見つからず、空は茜色に染まっていた。

「まさか・・・本当に・・・」

「いや、そんなはずは無い」

「うん！あんなだけ強いんだもん！
死んじゃうわけないよ、だから元気出して劉ちゃん」

「関さん、孫策さん」

涙目ながら強がる表情する。

ガサガサ ガサガサ

「くっくっ！」「くっく」

茂みの向こうから草の掻き分ける音が

「玄德！下がっている！」

「は・・・はい・・・」

関羽は青龍偃月刀を構え、孫策も拳を握り締める
茂みの奥から・・・

「うおおおおおおおおお！」

刃が飛び出し、三人を横切り走り去った

「実際歩くと結構流されましたね」

「何のんきな事言ってるんだ、馬鹿野郎」

「そうだ、この方向音痴」

その一言に刃は顔をしかめ

「な！そ・そんなこと」

「あるだろーが馬鹿野郎！」

「まったくだ・真反対から戻ってくるなど地球を一周したのか？」

二人の言葉を必死に訂正する

「い・いえ、都会に来て、方向が・」

「ここは森だ！馬鹿野郎」

「地球の変化で頭の方位磁石が・」

「お前は動物か？・・・」

刃は二人の言葉に

「もういいですよ！方向音痴で・・・」

若干ヤケクソな感じで歩き出そうとしたが・・・

「うお！」

「「え？」」

刃は足が木の根に引っかかり、前を歩いていた二人に覆いかぶさる様に倒れた。

「す・・・すみ「おまえ・・・いい度胸してるじゃねえか・・・

「え？」

その両手はしっかりと胸を掴んでいた。この事実には刃は飛びのき、冷や汗をたらしながら

「ほっ・・・本当にm「覚悟はできてるか？・・・」え？・・・

」

孟獲はチュワンを手に構え、孟優は剣を抜き構える

「ちょ！・・・は・・・話をk」「問答無用だ（馬鹿野郎）」

「うわぁ」

チュワンを投げ、孟優は刃に駆け、近寄る
刃は攻撃を避けながら

「す・・・すみm「黙れ！」ひい！」

すれすれで横薙ぎの一閃をかわし

(とりあえず・・・)

刃は大きく距離をとり、

「三十六計逃げるにしかず！うおおおおおおお」

ダッシュで駆けていった、それを見た二人は

「まちやがれってんだ！馬鹿野郎——」

「逃がさん・・・」

それを追って走り去る。そんな事も知らない三人は

「い・・・生きていたな・・・」

「あれだけ元気なら安心だね！」

「はい、それにしても何で孟獲さんと孟優さんに
追いかけられているんですか？」

そんな事情を知らない三人も元気とわかり、帰路につく
刃は三人の事など視線に入らず

「逃げるな！馬鹿野郎」

「逃げてるんじゃない！戦略的撤退だ！」

「同じことだ・・・」

その追いかけては夜まで続いた。

命がけの鬼ごっこ（後書き）

いかがですか？

すこしネタですが楽しんでいただければ幸いです。
それではまた次回、感想お待ちしております。

狙われた劉備（前書き）

4日も休み、しかも更新が遅れてすみません。
新しく買ったゲームで更新がなかなか・・

狙われた劉備

「え〜と・・・ご無事でなによりです・・・」

「あ・・・ありがとうございます」

刃は前の一件で孟姉妹にしばらく、苦笑いをしながら返した。

「はん！てめえがわりいんだろ！馬鹿野郎」

「まっただな・・・」

二人はいまだに納得していない様子、その事に苦笑いするしかなかった。

「それにしてもその刀・・・」

「ええ、なにやら強い力を感じます・・・」

関羽と趙雲は口をそろえてつぶやく

「そうですね・・・この説明よりもさっきまでの事を話した方がいいですね」

「さっきまでのこと？」

その疑問に刃はこれまでのことを話した。
袁紹のこと、この地に眠る力のこと、姉の魂が狙われていること

「呂布の魂だと！」

「・・・はい・・・」

呂蒙は激怒した。呂蒙にとって呂布は掛け替えのなかった存在
それを利用しようというのだから怒るのも当然だろう。
そして、刃も

「・・・かならず・・・見つける・・・」

いつにも増して真剣な表情、殺気が漏れている。

「ああ、そうだな」

「で・・・でも・・・一体どこに？」

「わかりません、この刀を手にした瞬間どこかに
消えて・・・」

刃は疑問に思っている

「なんかあいつら、封印がどうのって・・・」

「確かに・・・言っていたな・・・その刀が封印を解く
と・・・」

孟姉妹がそうつぶやいた。刃は刀を見つめながら

「封印っていったい・・・」

「あたしらが知るかよ。馬鹿野郎」

「まあ、落ち着いてください。軍師、どう思いますか？」

趙雲の質問に孔明は首をかしげながら

「わからない・・・しかし、龍にも匹敵するのは間違いないだろう・・・」

「そうですね・・・」

刃はそれ以上聞かず、孫策が

「んっっ難しいことはよくわかんないけど、とりあえず敵をぶっ飛ばせば済む話しょっ！」

「つて、えらい簡単にすますなや！」

その気楽な質問に張飛がツツコミ、場が和む

「そうですね・・・見つけたら詳しい話をっ！」

刃は突然、殺気を感じ刃を構え、駆け出し

「きゃっ！」

劉備を抱えて飛び下がる。そこに剣が窓から劉備の座っていた場所に突き刺さる。

「誰だ！」

その事に皆が戦闘体勢になった。するといきなり周りが殺気に囲まれた。

「いきなり囲まれましたね・・・」

「そうだな。刀を奪い返しにきたのか？」

「いえ、党首に剣を投げたのなら狙いは刀では無いでしょう」

それぞれ窓を警戒しながら、

「話し合いは後にしやがれ！馬鹿野郎」

「まずは・・・囲みを突破するぞ・・・」

「よっし！いくよ！」

「うん（はい）（わかった）」

固まって家を飛び出る。目の前は武器を構えた兵士たち

「邪魔だ！」

” 月影流抜刀術 三日月 影払い ”

氣を付加した巨大な真空波はさらに多くの敵を巻き込み、包囲に穴

を開ける

「今だ！」

包囲に開いた穴を目指し、皆が駆け抜ける。しかしその包囲も次第に閉じていくが

「はぁ！」「」

孫策や関羽、呂蒙が氣を乗せた一撃で敵を吹き飛ばす。

「うわあああああ」「」

敵が空中に吹き飛ぶ、再び開いた包囲を全員が突破した。

「よし！」

「なんでこんな面倒に巻き込まれてるんだ？馬鹿野郎」

「知るか・・・」

文句を言いつつも待ち構えていた少数の敵を蹴散らす

「オラ！」

「ふっ！」

森を抜け出すため駆け抜けるが敵が後ろから押し寄せてくる

「はあはあ・・・待ってください・・・」

息を切らす劉備が遅れる。

「止まるな玄德」

「いそいで　っ！」

刃が近寄り後ろから飛んできた矢を弾く

「ここは僕が面倒を見ます。はやく行って下さい」

「な！一人では無理だ」

呂蒙が止めるが刃は聞かず

「早く劉備さんを危険な目に合わせないように」

「刃さん・・・」

「おまえ・・・」

皆が刃を見つめる、刃はニヤツと笑い

「それに・・・死ぬ気はありませんよ」

刀身が淡く光り、辺りに風が吹き荒れる

「わかった。待っているぞ」

「ええ」

そう告げ、刃を残して走り出す。

「行っ たかな？・・・」

一人、刀を構えながら、

「さあ、いくぞ・・・」

氣を纏い続けた刀は突如、漆黒の光に包まれた。

「この刀がこの”禁術”耐えられるか・・・試させてもらっぞ！」

刃は黒い一閃を放った。

顔良は慌てた様子で袁紹の元へ歩いていく

（こ・・・こんなことが・・・）

扉の前に行き

「袁紹様！」

「何だ顔料、騒がしい劉備は捕らえられたのか？」

袁紹の質問に首を横に振り

めに

「それどころではありません！劉備を捕らえるた
送った兵達が”一瞬にして消えました”！」

「なに！大軍とも言える数をか！？」

「はい！」

袁紹は焦りが見えた。森に放った兵は万に近い数
それを一瞬で消したのである。

に消え

「それだけではなく、地面がえぐられたかのような
地形さえも変わっています。」

「なに！いったいなにが・・・」

袁紹が疑問に頭をひねり、顔良も混乱していた。

「・・・帰り道・・・どっちだっけ・・・」

刃は一人になった事を後悔していた。

狙われた劉備（後書き）

いかがですか？

キャラの口調がとても心配です。孟獲はとても簡単でいいのですが・・・
オリ主と趙雲の口調が・・・

それでも楽しんでいただければ幸いです。

それではまた次回、感想お待ちしております。

帰還そして波乱（前書き）

どうもBLEYZです。更新遅れてすみません。
寒くてPCの前にあまり・・・
よく見たらこの小説、フラグが立っていませんね。
ヒロインは・・・まあ決めてますが・・・
それではどうぞ

帰還そして波乱

敵から逃れた孫策達は成都学園にきていた。

「刃さん大丈夫でしょうか？・・・」

「心配することないよ劉ちゃん」

劉備が心配し、それをなだめる孫策

「しかし・・・あの数は・・・」

「ああ・・・」

周瑜と樂就がつぶやくと

ガサガサ　　ガサガサ

後ろの茂みから音が聞こえ、皆が距離をとり、構える
その茂みから出てきたのは・・・

「おや？」

刃がひょっこりと顔をだし、

「皆さんご無事でしたか」

何ともないという顔で茂みから出てきた
入り口とは違うところから来たため、皆、啞然としていた

そんな事を知らない刃は

「?・・・鳩が豆鉄砲を食らった顔をしていますよ?」

「いや・・・なぜそこから?・・・」

その問いに刃は疲れた顔をし、

「いえ・・・帰り道がわからなくて・・・

みなさんの氣を頼りにたどってきたら此処に・・・」

どこか虚ろな目をしたまま遠くを見つめる。そんな様子に皆が

「と・・・とりあえず!ご無事で何よりです!」

「そ・・・そうそう!ほんとよかったよ!」

「あ・・・ああ・・・」

「そうですね。無事でよかったです」

それぞれ無理やり声をひねり出すような返し、しかし刃は笑顔で

「ありがとうございます!」

「それで?敵は?」

刃はすこし笑みをうかべ

「もちろん、退けましたよ」

「そうか・・・さすがだな」

呂蒙は納得した表情をしていたが

(・・・)

趙雲だけはその問いに疑問を浮かべていた。彼の顔が一瞬歪んだのを見逃していなかった

「そういえば・・・なんであたし等までついてきてんだ？
馬鹿野郎・・・」

「知るか・・・どの道もどれないだろう？・・・」

孟姉妹は成都学園についてきたようだ。刃は

「まあまあ、落ち着いて・・・」

「落ち着いてられるかよ！馬鹿野郎」

孟獲は刃を掴み、後ろに投げるそこに

「おい！」

「えっ！」

ドカ！

孟優がいた。刃は孟優とぶつかり

「イテテ・・・懲りないようだな・・・」え？」

刃は孟優に覆いかぶさるように倒れて

「ああああのこここれはj」知るか！」「うお！」

刃はその場を飛び避け、孟優の攻撃をギリギリ避ける

「ちょ・・・ちょっとm」刃さん・・・へ？」

そこに刀を構えた趙雲がいた・・・

「ちょ・・・趙雲さん？・・・なぜ？・・・」

無表情だが趙雲の背後からドス黒い気配が漂い

「少し・・・お話をいたしましょうか・・・」

普段閉じている目を見開き、刃に切りかかる
それを避け、あさつての方に向かって

「なんでだ~~~~~」

叫びながら逃げる。二人は逃がすわけがなく

「逃がさん・・・」

「破廉恥は許しません・・・」

二人が構え、刃を追いかける。それを見ていた皆は

「なんで子ーさんも?・・・」

「な・・・なんででしょう・・・」

「・・・趙雲よ・・・まさか・・・」

孔明はうつむきながらつぶやき、二人は疑問を抱いている

「まさか・・・子ーさん・・・あいつの事・・・」

「まあ・・・思い当たらないでもないが・・・」

二人はなにやら納得した表情をしてつぶやいた。
そんな事など知らない呉の面々は

「?・・・ねえ公瑾・・・どういうこと?・・・」

「えーと・・・なんでだろ?・・・」

「まあ、いいんじゃないか?」

「・・・いいのか?・・・」

孫策は本当にわかっておらず、周瑜はわかってはいるがはぐらかす
呂蒙は気にしていないとした顔、樂就は刃の安否を心配していた
刃は必死に逃げながら

！
」

「せ・・せめて話ぐらいw」「問答無用！」「え〜〜

帰ってきて疲れているのにさらに体力を使い、それでも死ぬまいと逃げ続ける。

破滅の力はすぐに迫っていると知らずに・・・

帰還そして波乱（後書き）

なんか無理やりフラグを立てたような気がします・・・
それでも楽しんでいただければ嬉しいです。しかしネタが・・・
それでは次回、感想おまちしています。

恋の予感（前書き）

どうもBLEYZです。ちょっとラブコメ回になりました。
キャラ崩壊しないといいいのですが・・・
それではどうぞ

恋の予感

「刃さん・破廉恥はいけませんよ？」

「・・・はい・・・」

趙雲の前に正座している刃の後、結局捕まり、孟優による鉄拳制裁にの後に趙雲によるお説教が始まっていた。

「あの出来事では確かに不可抗力ですが
彼方ほどの腕があるのならかわせたはずでしょう？」

「そ・・・その・・・戦闘中のように常に気を張っていれば
できなくも無いのですが・・・」

「ならば常に気を張りなさい！」

「はい！」

無論そんな事は無理に決まっているのだが趙雲の有無を言わさない
雰囲気は圧倒され返事は常に”はい”しか言えない
そんな様子を

「子ーさんのあんな説教聞いたことないわ・・・」

「そうですね・・・初めて見ました・・・」

「やはり趙雲は・・・」

張飛、劉備、孔明の三名が覗き見をしていた。

「でも・・・なんででしょうか?・・・」

「おまつ! 気づいてないんか?」

「はい?・・・」

明らかに理由をわかっていない劉備に張飛はため息をつき

「なんであんなに怒るで、あいつが好きやからに
決まってるやろ?」

「え?・・・ええええええええええ!!」

初めて知った劉備は驚きのあまりに大声を出してしまった。

「ちょっ! 声!」

「誰ですか?・・・」

趙雲が声に気づき近寄る。三名は不味いとすかさず走り出した。

「逃げるで!」

「はい」

「わかった・・・」

それぞれ走り去る。趙雲は追うこともなく振り返り、刃に向き直り

「話はまだ・・・終わっていませんよ・・・」

「は・・・はい・・・」

ドス黒い笑みにそれ以上、何も言えず説教は続いた。

「だ・・・大丈夫？・・・」

「・・・・・・・・・・」

やっとの事、説教が終わり、部屋の周瑜、樂就に倒れこんだ

「だいぶやつれてるね・・・」

「魂の抜け殻みたいだな・・・」

「・・・・・・・・・・」

刃は何も喋る気力がなく、地面に突っ伏している。

「趙雲さんのあの行動には驚きましたね。」

「ああ、物静かな感じで今でも信じられないな」

「・・・・・・・・・・実際・・・・被害が・・・・でて・・・・」 ガク

それ以上は喋れず、再び力なくうなだれる。それを見て二人はため息しか出なかった。

「なぜ・・・・こんなにも面白くないのでしょうか・・・・」

趙雲は刃と分かれた後、今までの自分の行動が理解できず頭を捻っていた。

「孟優さんに抱きついたのを見たときに感じたこの感情はいつたい・・・」

どれだけ考えてもわからない気持ちにモヤモヤしていると

「なんや子ーさん？考え事か？」

「趙雲さん？どうしたんですか？」

「考え事か？趙雲よ・・・」

覗きをしていた三人がやってきた。考えていた事を頭の隅に置き

「いえ、たいした事ではありません」

「そんな事言ってゝ実は刃の事考えてたんとちゃうかゝ？」

「え！そうなんですか?!」

突然の質問に顔を赤らめ、取り乱した。

「い！いえ、そんな事は・・・」

「んゝ？どうした子ーさん？顔が赤いでゝ」

「ややややっぱりそそそうなんですか?!」

張飛はニヤツとして、劉備は顔を真っ赤にしながら落ち着きがなく
しかし興味があると言った顔で、孔明は下を向きながら小さく
”やはり”とつぶやく

趙雲は諦めたかのようにため息を吐き

「はぁ・・・なぜその事が・・・」

「なぜもなにもなぁ・・・さっきあんなに”嫉妬”して
いて

わからん訳あるかい」

「嫉妬？」

趙雲は嫉妬しているのか理解できず、聞き返す

「この感情は嫉妬なのですか？」

「はぁ？なにゆってんねん。当たり前やろ」

「なぜ私が嫉妬を・・・」

「なぜって、子ーさんがあいつのこと”好き”やからと
ちゃうんか？」

「っ！！／／／」

”好き”と言う言葉に顔を真っ赤にした趙雲、異性に対して”好き
”という

感情を抱いたことがないためか理解できず、それを知ると体の火照

りが

止められなくなった

（私は彼を好いているのですか？・・・）

趙雲が”好き”と理解した瞬間だった。

「・・・ねえ、周瑜さん 樂就さん・・・」

「え！・・・あ・・・なに？」

「どうした？」

ずっと突っ伏したままの刃がいきなり喋りだしたことに驚きながらも返す

「趙雲さんは僕のこと・・・」

「「っ!」」

（もしかして気づいたのかな?・・・）

（まさか・・・あれで気づいたのか?・・・）

二人ともドキドキしていると

「僕のこと・・・嫌いなのかな?・・・」

「「・・・」」

その問いに二人は再びため息を吐き

（気づいてないか・・・）

（まあ・・・あれではな・・・）

二人とも無理もないと言った顔で

（（趙雲^{さん}も大変だ（な）））

趙雲は苦勞するだろうと思う二人だった。

恋の予感（後書き）

いかがでしたか？

楽しんでいただければうれしいです。

それでは次回、感想お待ちしています。

悲しみの行方（前書き）

どうも、更新遅れてすみません。なかなか続きが浮かびませんでシリアス回です。楽しんでいただければ幸いです。
それではどうぞ

悲しみの行方

予州学園

そこは許昌学院に破れ、今では許昌学院の傘下に下った勢力しかし

「袁紹さま、準備が整いました。」

「顔良か・・・ではいいよ・・・」

「はい、劉備を手に入れてみせましょう・・・」

「いやな感じがする・・・」

ある朝、刃はそのなんとも嫌な感じで目が覚めた。首筋がゾクツと

する感覚、闘いの最中によくこの感覚に頼る事がる。

「・・・・・・・・」

闘いがあるかもしれない。そう考えると、ふと手元にある”嵐月”に目をやる。

「この刀は・・・危険だ」・・・」

月影流には存在していない自分で編み出した技にして自ら禁じた”禁術”を使ったのにもかかわらず

存在し続けるこの刀はそこの名刀よりも優れ、かつ危険な妖刀

「使わざるをえないのか?・・・」

刃は静かに苦悩し、何かを思い出すようにして悲しみにふける

「朝・・・ですか・・・」

趙雲は窓に目を向ける。外はすでに太陽が昇っていた。

張飛達に聞かされた自分のこの思いに悩み、一睡もできなかった。

「・・・・・・・・」

何度も刃を考えるがその度にドキツとする

「やはり・・・・・・・・」

顔が赤くなるのが自分でもわかるほど火照り、すぐに思考を切り替え

「いえ・・朝になったのなら鍛錬をしなければ・・」

毎日の日課、体を動かせば自然と考えなくなるだろう

そう思うとサツと着替え、刀を持ち、外へ向かう

そこに

「っ！／／／」

刃の姿があつた。一心に刀を振るう、その姿に一瞬ドキツとしたが

「・・・・・・・・」

刃の刀を振るっている姿に違和感を感じた。いつもの舞のような美しく、実践的な動きではなく

荒々しく、乱れた動きだった。剣を全く持たない者であれば気づかっただろう。しかし趙雲は剣士その違いに気づかないはずがない

「なにか・・あつたのでしょうか？・・・」

剣に現れる程の気の迷い。趙雲は気になり

「刃さん！」

刃を呼び止めた

「ハア！ ふっ せや！」

いつもの様に刀を振るう。でも、あの日の事を思い出してしまう。
袁紹の追っ手を退けるはずだったのに、全員”消して”しまったあの日を
どうしても心が乱れる。

「はああああああ！」

声を上げ、振り続ける。あの日の事を忘れたいが為に
だが、そんな事できるはずがない。それでも振り続ける。一瞬でも
忘れたいが為に

「ハア・・・ハア・・・」

息が切れる。それでも忘れる事はなかった。そんな時

「刃さん！」

一人の声に振り向く。

「ハア・・・趙・・・雲・・・さん？」

「どうしたんですか？ 剣が乱れていましたよ？」

何も言い返せない。あれはただがむしゃらに振るっていただけなのだから、

「彼方の剣から悲しみのような感情を感じました・・・
何かあったのですか？・・・」

趙雲の質問に言葉が出ない。その理由を軽々と話せない。

「そ・・・それは・・・」

「心配せずに話してみてください」

刃はうつむき悩みながらも趙雲に向き直り

「わかりました・・・ただ、少し場所を変えましょう」

そうつぶやき、森の奥に入っていく、趙雲もそれに続いた。

「ここならいいでしょう・・・」

そういつて趙雲に向き直る。それでも表情は決心がついた目をしながらも、
重い表情をしていた。

「できれば・・・この事は誰にも言わないでほしいんです」

「・・・わかりました」

その表情で趙雲も頷いた。

「袁紹の追っ手が来た時、僕が退けたと話しましたね？」

「ええ」

「実は退けたのではなく、全員”消した”んです」

「け・・・消した?・・・」

趙雲は困惑した。”消した”という意味が理解できなかった。

刃はその様子続ける。

「ようするに全員”殺した”んです……」

「っ!!」

表現を変えるだけで趙雲は理解した、しかし

「”消す”というのはどういうことですか？」

「そのままの意味です。跡形もなく消したのですから
僕の創った技で……」

「その技はいつたい……」

「この技は”消す”んです。そこに何もなかったかの
ように」

趙雲は冷や汗をながした。どんな技でも剣を使うのなら”斬れる”
もの

”無くなる”はずはない。

「それで心を乱していたのですか？」

しかし、敵は私たちの命を狙ったのなら気にするこ
とでは……」

「違うんです……思いだしてしまうんです」

重い表情のまま、目に涙を滲ませ

「僕が” 師匠を消してしまった” 日を・・・」

悲しみの行方（後書き）

いかがですか？

次の更新はもっと早くやります。

それではまた次回、感想お待ちしております。

過去の記憶 前編（前書き）

どうも、BLEYZです。

今回は早く投稿できたと思います。

それではどうぞ

過去の記憶 前編

「うっ・・・ぐす・・・」

少年は泣いていた。ある一人の少女が下した決断を
なにもできない自分を悔やみ

「うっ・・・ひっく・・・」

「泣くな、小僧」

刀を持った男が少年に近寄り、手を頭に乗せる

「どうしたんだ？」

「お・・・お姉ちゃんが・・・ひっく・・・悲しそうで

僕・・・弱いから何もできなくて・・・うっ・・・うえ・

」

「そうか・・・なら、俺が鍛えてやろっか？」

少年は泣き止み、顔を上げる

「お・・・おじさんが？・・・」

「ああ、この刀に誓ってな」

そういつて腰にある刀を鞘ごと抜き、少年に見せる

「おじさん・・・強いのか・・・」

「まあ、一応な”月影流継承者”だ」

「月・・・影・・・流？」

少年は首を捻りながら言葉をなぞる。男は苦笑いをし

「はは、まあ知らないよな。だが約束は絶対だ。
お前を弟子にしてやるよ。」

「弟子・・・」

少年はその言葉に、うつむき、しかし、涙を吹き払い
その男に目を合わせる。その目には一つの覚悟が浮かんでいる

「いい目だな・・・少年いや弟子よ。名は？」

少年は名を名乗る。その名はある一人の少女に受け継がれるはずの
名前

しかし、少年は覚悟を決める。大切な姉のため

「僕の名は・・・・・・」

「師匠は優しい人でしたけど・・・すこし・・・いや、かなりだらしなくて・・・」

刃は語る。月影流継承者にして自分の師を

分を

「でも姉さんが決めた決意に泣く事しかできなかった自分を助けてくれた師匠には感謝してました」

「いいか？月影流は氣の扱いに優れた剣術だ。氣を操れなきゃ話にならねえ」

「氣？」

「そうだ。体にある目に見えないエネルギーみたいなものだ。」

刃はわかってないように頭を捻る。男は苦笑いしながら

「難しいかな？まあその氣を操るために自分の氣配を操れるようにしないといけねえ」

月影流の考えに氣は体のエネルギー、それが無意識に体外に流れ出ているのが”氣配”
氣配を操れて、氣をコントロールする。

「というわけでここだ！」

「錢湯？・・・」

師匠はニヤニヤしながら

「そのとおり！！ここで気づかれずに見続ける修行だ！
！」

すでに変態親父の顔つきになりながら鼻息を荒くし、覗こうとする。
刃は自分の中で何かが壊れる音がし
そして変態師匠の頭を殴りつけ

「何をする弟子よ！これもりっぱなs h」黙ってください
い・・・」

なにやらドス黒い氣配が漂い、師匠を睨む

「ままままで！これh」早く・・・修行しましょう・・・
はい」

弟子の勢いに負け素直に折れる。そしてちがう修行へ向かう

「着いたぞ」

「……?」

そこは深い森で目の前は真つ暗な洞窟があり、すぐ横に川が勢い良く洞窟に向かつて流れている。

「ここで何を？」

「ああ、ここで気配を感じる修行をする」

「気配を感じる修行？」

「そうだ。月影流には基本であり、重要な事だ。」

そう言うといきなり刃を持ち上げ

「そりゃ――――！」

「ええええええええ？！」

流れの速い川に投げ込む。なにもできず洞窟の奥に流されていく

「適当なところで流れ着くだろ！そこから戻ってこいよ」

「無理言っなこのアホ師匠—————！」

「ぜえ・・・ぜえ・・・」

「むぐ？戻ったか、モグモグ」

命がけで戻ってきた刃の目の前に一人だけ焼き魚を食べている師匠がいた。

「なに・・・食ってんですか？・・・」

「何って魚だが？目が腐ったか？ムグムグ」

その一言にカチンとして

「ブツ殺す！」

「あらよつと」 ヒョイ

殴りかかった刃の拳をヒラリと避け、そのまま背中を押し

「ほら、もっかい行ってこーい」

「うあああああああ」

再び川に流され、洞窟の奥へと流される

「覚えてろよーーーーー!」

浮かぶだけでも必死な様子で流されていく

「……気づいてないな……」

刃は洞窟から師匠に気づかれないように眺める。すると後ろを向いた

「いまだ!」

ダッシュで駆け出し、師匠に一気に近づく、そして

「死ねええええええええええええ」

殴りかかった。刃は捕らえたかと思いきや

「俺流！ワンスモア！」

突然、後ろを向きその手を掴み、どや顔をし格好をつけながらまたしても川に投げ飛ばす

「己を磨き続けろ！若き少年よ！」

「格好つけてんじゃねー！ー！ー！」

そして、再び漆黒の洞窟へと流されていく。

「何で・・・はあ・・・こんな事・・・ふう・・・ばかり続けて・・・」

暗闇をひたすら走る。出口へと向かって

「あのじい・・・絶対ぶっ飛ばす・・・」

そう固く決意して出口に向かい走り続ける

「もうすぐ・・・はあはあ・・・でぐちっ！」

突然出口から何かが向かってくるのを感じ、慌てて横に避ける

「うわあ！」

転げながら何かを避ける。そこに

「まあ・・・合格だな・・・」

拳を前に突き出す師匠がいた。刃はその事を理解し

「だら！」

「ぐふ！」

殴り飛ばした。すぐに起き上がり

「なにすんだ！」

「こっちのセリフだ！なんでこんな事」

「言っただろ。気配を感じる修行だ。」

何度も何度も投げられ、頭に来ていたがそのことを理解し

「そういえば攻撃を避けたような・・・」

「避けたんだよ。それで合格だ」

何度も投げられるのは癪だったものの、効果があったので何も言わず

「着いて来い弟子よ・・・次は氣の使い方だ！」

「・・・はい！」

やり方は氣に入らなかったがこの人について行けば強くなれる
そんな気がしていた。

過去の記憶 前編（後書き）

いかがでしたか？

師匠とありますが名前はなしでいきたいと思います。

下手な名前使って作風を壊したくないので

それでは次回、感想お待ちしています。

過去の記憶 中編（前書き）

どうもBLEYZです。

今回もほのぼの続きます。

過去編もつぎで終わると思います。
それではどうぞ

過去の記憶 中編

「あの・・・刃さん？」

「・・・そういえばあの時だって・・・ぶつぶつ・・・」

師匠の話をしていたはずがいつの間にか過去の暗い話に変わり
そのすべてが師匠に関連しているので
刃はさらに暗くなっていた。

（一体どのような修行をしてきたのでしょうか？）

「・・・ぶつぶつ・・・」

暗い嘆きで話は続く

「お前もだいぶやるようになったな」

「本当ですか?!」

刃の太刀筋を見て感想を口にする。それだけではなく氣の扱いもできてきた

ように

「おお、暗いところに閉じ込めて本当に氣を使える
なるなんてな。冗談でやったのにh「師匠・・」
ん？」

「あの修行は冗談でやったんですか?・・」

その一言に苦笑いをしながら刃は問い詰めた。師匠は笑いながら

「ああ、暗いところに閉じ込めただけで使えるわけ
ないじゃん

なのに本当にできるようになるとか「覚悟は・・
できてますか?」え?」

刃は刀を抜き放ち、構え殺氣を膨れ上がらせる。それに気づいた師匠は
自分の言った過ちに冷や汗を流しながら

「ままで!結果的の使えるようになったのなら「関係あるか!」うお!」

ヒュッ!

風を切り裂く音とともに刀が薙ぐ。それをぎりぎりで避け

「何をする！」

「何を？今言った自分の言葉を思い出せ！」

納得のいかなくても習得できたのでなにも言わなかったのだがそれが冗談だったと聞かされ、刃は怒りで頭がいっぱいだった

「まままままで！今度は真剣に”奥義”を教えるから！」

「奥義？」

その言葉に手を止める。初めて聞いたことに興味深々だ。手を止めた事に
師匠はホッと息をつき

「そうだ。まず、奥義”月光”だ！」

「月光？・・・」

「そう。月光とは刀に氣を流し、攻撃力を上げる奥義だ」

刃は頭を捻る。氣は体にめぐらせれば身体の強化できる。当然、傷の回復も早めることができる。刀に流すだけで奥義と言うのは疑問を覚えた

「本当に奥義なんですか？」

「当たり前だ！そこまで言つのならやってみる！」

「・・・わかりました・・・はああ！」

刃は言われたとおり刀に氣を流す、しかし

バキィィィィン 「うわ！」

いきなり刀が弾けるように壊れた

「な・・・なんで？」

「当たり前だ。刀は体の一部じゃないんだ。当然、流すにも限度がある。」

それに刀ごとに限度が違うし、お前は氣量が多い。当然の結果だ」

「なるほど・・・」

刃はその答えに納得した。氣は調節できるが難しい。奥義と言うだけのことはある

「それに刀に氣を流すのは無理がかかっている。一定でも

流し続けるのは不可能だ。それこそ特殊なものでない限り」

刃は納得し、修行に力を入れると決め、再び鍛錬を始めようとするが

「さて刃、もうひとつ教える奥義がある。」

「もうひとつの奥義？」

「そう。奥義”影封じ”だ！」

「影封じ？」

もう一つの奥義を伝授できると喜びその詳しい詳細を食い入るように聞く

「影封じは相手に特殊な氣を流し込み、相手の氣を封じる奥義だ」

「相手の氣を！」

相手の氣を封じる。そんな事が可能だという事に刃は驚いた

「百聞は一見にしかずだ・・・いくぞ！」

「っ！」

刃を構え、刃に切りかかった。それを鞘で受けるがそこを

「こつだ！」

「なに！」

手のひらが光り、まるで氣を握るような感じで腹に掌底を打ち込む刃はのけぞるが

「氣を籠めた一撃なのに強い衝撃がない?・・・」

あまりに拍子抜けだが次の瞬間

「っ! 氣が練れない!」

「これが影封じだ!」

刃は奥義をその身に感じて奮い立つ、本当に氣が使えないのだから

「すごい・・・師匠のこと、消しカスよりは認めますよ!」

「・・・普段おまえが俺をどう思っているかよくわかった」

テゴリ
「い・・・いやだなあ師匠、とりあえず靈長類には力

してますよ」

「あたりまえだが!てか、前はそうじゃなかったのか」

こめかみをぴくぴく動かしながら怒りを抑えたようにいうが

「ゾウリムシから人類の底辺ぐらいには」

「ふざけな!」

「大真面目ですよ!たいした進化じゃないですか!」

「論点はそこじゃねえよ！」

二人の言い合いはまだまだ続いていた。

過去の記憶 中編（後書き）

いかがですか？

今回は短いかな？

楽しんでいただければうれしいです。

それではまた次回、感想お待ちしています。

過去の記憶 後編（前書き）

どうもBLEYZです。

シリアス回です。もうすぐ新年迎えますね。

過去の記憶 後編

「はぁ．．．はぁ．．．またか．．．」

刃は月光の修行をしていた。後ろには修行の残骸が多数落ちている

「何回やっても30秒持たない．．．」

空は夜、月だけが照らす空は雲が続く、それでも修行をやめる事はせず、強い光がはじけるだけだった

「ふう、影封じできたのに．．．なんでだ．．．」

「まだやってたのか」

師匠が焼き魚を持ったまま様子を見に来た

「何度やって壊れてしまんですよ．．．」

「．．．．材料は無限にあるわけじゃないぞ．．．」

頭をかかえ、ぶつぶつ言ってる。刃もその残骸を眺め

「．．．すみません．．．」

「まあいい、氣を流すコツは薄く鋭くイメージだ。量を多くする必要はない」

「薄く．．．鋭いイメージ．．．」

そうつぶやくと自分の持っている物に目をやり

「はあああ・・・」

目を深く閉じ、氣を流す。薄く鋭く自分の氣をイメージする
そして、目を見開き

「はあ！」

目の前にあつた木を切る

ズドオオオオン

刃のない鉄の棒で木を切り倒した。刃は目をやり師匠は

「お！できたな」

「はい！」

「しかしはえゝなあ・・・おれは一週間かかったのに
お前は2日でできちまうなんてよ」

「早く強くなりたいんです。感覚忘れないようもう少し
続けます！」

そう言つて再び氣を流し始める。師匠は「そうかい」といい
寝るためもとの場所に戻つた

「・・・別のイメージで氣を流したらどうなるんだろ・・・

」

そうつぶやき、氣を流す、すべてを消す漆黒をイメージする。すると

「な・・・なんだこれ？・・・」

持っていた鉄の棒が漆黒の包まれた。氣味が悪く氣を止めようとしたとき

氣の流れを止める事ができず、むしろその無い漆黒の吸い込まれていく

その感覚に恐怖し

「う・・・うわあああああああああああ！」

悲痛な叫びが響いた

「弟子もいつの間にか強くなつてまあ・・・」

酒を飲みながら彼を弟子にしたことを思い出していた。
そこにどこか嬉しそうな表情があつた

「もう教える事もないしな・・・」

思い出に浸っていると

「う・・・うわあああああああ！」

愛すべき弟子の悲痛な叫び耳に届いた

「っ！何が！」

手元にある刀を持ち、彼のもとに向かうそこには

「ぐっづづづづ」

まるですべてを吸い込む闇が纏わりついている様だった。その様子に刀を抜き放ち切り伏せようとするが

「なに！」

まるで削り取られたかのように刀身が無くなっていた
もっていた柄を投げ捨て、そして

「うおおおおおおおお」

その腕にしがみ付いた。だがその腕も削りとられたそれをみた刃は

「やめろおおおおおおお！」

どれだけ叫んでも止められない。何をどうしても氣を吸い取られてしまう

氣は体のエネルギー使えなくなってもなお使おうとすれば
その先に待っているは”死”

「師匠！やめてくれ！」

「やめるか！ばかか！」

腕が無くてでもそれでもなお止めようとしがみつくすでに両腕がない

「やめてくれえええええええええええ！」

その叫びが夜空に響き、その悲痛な願いが叶ったかのように
その漆黒の光は夜の空に消えた

「し・・・師匠・・・」

刃の目にはとめどなく涙がながれる。自分が馬鹿なことをしなければ自分が巻き込まなければ、そんな自己嫌悪が頭の中を駆け巡る。すでに師匠の体は腕が無く、下半身も消えてなくなり、血は止まることなく流れ続けている。

「じ・・・ん・・・」

「師匠!」

喋るのが辛うじて、苦しくも続ける

「気がつけば・・・お前は・・・俺より・・・つ・・・よ・・・」
「ほ!」

「喋らないで!今すぐ」無理だ・・・こんな状態で」でも」!

吐血をしながらも喋るのをやめない。死ぬ前に伝えねばならない

「教える事は・・・すべて教えた・・・お前は・・・月影流を名乗れ・・・」

「し・・・師匠・・・」

血だらけにかまわず手を握る。最後のぬくもりを感じるため

「それは・・・お前の・・・技だ・・・本当に・・・守りたい時だけに・・・」

「はい・・・」

「お・・・お前との・・・日々はなかなか・・・たの・・・し・・・
・・・」

250

言い切ることなく目を閉じる。意識をしていなくとも人を
しかも自分の恩人にして師匠を殺めてしまった。

その後悔と悲しみで頭がいっぱいになり、その夜はまるで刃の心を
映すかのように
雨が降り注いだ

過去の記憶

後編（後書き）

いかがでしたか？

新年迎えた瞬間にいえるかわからないので言っておきます。

あけましておめでとございます！

動き出す闇（前書き）

どうも、BLEYZです。

最近は更新が遅れて申し訳ございません。

ゲームに集中するとなかなか書けなくて・・・

楽しんでいただければ嬉しいです

ではどうぞ

動き出す闇

すべてを語り終えた。刃は目を瞑りながら無言
趙雲も話を聞き終え、悲しみの感情が芽ばえる

「すべては自分の力不足のせいだ・・・そのせいで師匠は・・・」

刃の目に涙がにじむ、

「それだけじゃなく、この刀を持った時、試さずにはいられなかった。この技を使うのを

そんな自分が・・・怖い・・・」

「・・・それでもいいじゃないですか」

趙雲の言った言葉に涙を浮かべていた目を見開いた。

「何を言って・・・」

「なぜって・・・私たちを助けてくれたじゃないですか」

趙雲は続ける。彼に慰めと感謝を込めて

「その時、彼方にどのような感情があったとしてもその結果に
私たちは助かったのですから

その技が危険でも守るためならば迷わず振るえばいいのです
よ」

その言葉に今まで重苦しく胸を締め付けていたものがなくなる気が

した。

目から涙が溢れ出す。

その様子を見ていた趙雲は長くこの事を苦しく思っていたのがわかった

「ありがとうございます。趙雲さん」

「いえ、私の思ったことを正直に言っただけですよ」

刃は泣き止み、趙雲に感謝の気持ちを述べた
あの出来事は今でも忘れられず、今まで自分に重苦しく押し掛かっていたからだ
すべてが吹っ切れたわけではない。しかし、
を締め付けていた何かがなくなった気がした
そうしてくれた趙雲に笑顔で

「本当に……ありがとうございます。優しいんですね」

「っ！／＼」

その笑顔で趙雲の顔が真っ赤に染まり、顔をそらす。
その様子に刃は戸惑う

「？……どうしました？」

「い……いえ……なんでもありません」

趙雲はその笑顔に当てられ、顔を合わすことができないでいた
すると突然遠くから

ガシャーーーーーン

遠くからガラスの音が割れる音がした

「っっ!」

その音に二人はすぐに刀を手にとり、その方向に走り出した

「ふあ・・・良く寝ました」

気が抜けた声で起きた劉備、窓の外を眺め

「いい天気ですね」

いそいそと起き上がり着替えをすます。そしてドアに手を伸ばした、しかし

ガシャーーーーーン

突然、後ろからガラスが割れた音がした。振り向くと

「お前が劉備だな・・・」

「え？・・・」

ビシッ！

「あ・・・」

首の後ろを手刀で打ちつけられ、気を失う。顔を隠した男は劉備を肩に担ぎ、窓から立ち去ろうとしたが

「どうした！玄德！」

青龍偃月刀をもった関羽がドアを開け、飛び込んできた

「貴様！何者だ！」

「ちっ！」

男は舌打ちをし、窓から飛び出す。その時、手に持っていた何かを投げた

「そんなもの ハア！」

関羽がそれを切り裂くが

ボン！

「なに！」

それが突然破裂し、部屋中が真っ白になる

「ゴホ！ゴホ！ くっ・・・しまった」

それが晴れた時、そこにその男はいなかった。

「窓が割れてる・・・あの部屋は？・・・」

「っ！頭首！」

部屋の場所を知った趙雲は走る速度を上げ、刃もそれに続く飛び上がり屋根に飛び乗りそこから中の様子を見るそこに

「くっ！・・・」

片膝ついて動かない関羽がいた。

「関羽さん・・・一体なにが・・・」

「すまない・・・玄德が・・・つれて・・・いかれ・・・」

手足が振るえ、片膝着くのが精一杯な様子だった

「これは・・・まさか痺れ毒・・・」

「おそらく・・・男が逃げるさいに投げた・・・煙幕に・・・」

「とにかく追いましょう」

「しかし・・・敵がどこだか・・・」

「任せてください」

刃は目を閉じ、氣を極限まで抑え、劉備の氣を探る

” 月影流探知術 月代 影追い ”

氣の扱いに優れた剣術で氣を探るの事にも長けている。それを極限にまで

追求したのがこの技。

刃はこの技を使い、劉備を探っていると

「見つけた！・・・この男は・・・顔良！」

「なに！という事は相手は・・・」

「予州学園・・・という事ですか・・・」

毒が抜けたのか関羽が立ち上がり、青龍偃月刀を握り締める。

「ヤツが向かっているのはあの洞窟か！」

「話していた・・・鬼の力が眠っている地か？」

「ええ・・・まさか！」

刃はその時感じた、奴らは”劉備を生け贄にするのでは？”とその考えに背筋が振るえ、そして怒りを覚えた

「・・・殺してやる・・・」

「っ！」

その目に宿っている光は”殺意”その強烈な殺気以上の何かに二人は体がすくんだ

（なっ！この強烈な殺気は！）

（っ！刃さん・・・落ち着いてください）

刃は殺気を剥き出しのまま窓から飛び出し、無言で顔良の後を追う二人はあまりの強烈な殺気に身動きができなかった

「な！なんや？ どないしたんや？！」

「どうしたの！劉ちゃん！」

「・・・なにがあつた・・・？」

刃の強烈な殺気に当てられ、それ以外の闘士達も集まってきた

「玄德が袁紹に連れ去られた」

「え〜〜〜〜〜!」

「何やて!」

「じゃあ さっきのすごい殺気は・・・」

「いえ・・・今の殺気は刃さんです・・・」

「「「えっ!」」」

出会わせていないものは一様に驚き、関羽は自分の不甲斐無さに床を殴りつける

「くそっ! 私がしっかりしていれば」

「早く追わなければ・・・」

「でも何で劉ちゃんを?・・・」

孫策の疑問に孟優が

「おそらく・・・鬼の力を使うための・・・生け贄か?・・・」

「「「なっ!」」」

その事に驚き、孫策が拳を握り締め

「なら早く追わないと!」

「ええ、それに今の刃さんはとても心配です」

「ああ・・・あれだけの殺気をばら撒いてたんだ・・・危険だな・・・」

「

「急ぐぞ！」

そしてその場にいた皆が駆け出す。劉備を助けるために

（刃さん・・・御無事で・・・）

趙雲は刃の無事を祈り、刀を握り締め、彼が放つ遠く離れてもひしひし感じる

殺気追うため走り出した

動き出す闇（後書き）

いかがですか？

過去編は終わりで物語りは進みます。

それではまた次回、感想お待ちしています。

刃の敗北（前書き）

どうも、BLEYZです、

今回は新展開でシリアスです。

寒くて手が悴んで誤植があるかもしれないです。

それでも楽しんでいただければ幸いです。

ではどうぞ

刃の敗北

薄暗い洞窟、ろうそくに灯される火の光だけが辺りを照らす暗闇に肩に女性を担ぎ奥にある祭壇に向かい歩いていく。

「袁紹様、ただいま戻りました」

「戻ったか・・顔良よ」

顔良は劉備を目の前に置き、跪く

「袁紹さま、お急ぎください。刀に選ばれたあの男が追っています」

「そうか・・儀式を急ぐぞ」

「はい・・さつそく」袁紹様！！」

一人の男が必死の形相で走ってくる。その様子には二人は嫌な予感を感じた。

そしてその予感の的中する事となる

「緑の髪の手を持った男が入り口に・・・」

突然、男が喋るのを止めた。

「?どうした・・」

すると男がゆっくりと倒れだし、その後ろに刀を持ち

真っ赤な血を全身に浴びた一人の男が立っていた……

「貴様……」

「……………」

無言、しかし言葉を発していかなくとも彼からにじみ出る濃密な殺気が二人を息苦しく威圧する

「ぐ……う……」

そして、彼は声を響かせる

「……………斬り……………」

発する声ひとつひとつ殺意を籠めながら……

「……………殺す……………」

「はぁ・・・はぁ・・・まだ着かないか？」

「ああ・・・あと少しだ・・・」

孟優に先導され、走り続ける関羽、趙雲、張飛、孫策

「早くしないと・・・玄德が！」

「うん、劉ちゃんを助けよう！」

「ええ、それに刃さんも気になりますから・・・」

刃が負けると考えているわけではない。趙雲がもっとも心配しているのは

あの異常なまでの殺気
本当に刃かと疑うほど

「・・・着いたぞ・・・」

考えている間に敵がいる洞窟の入り口へと着いたが・・・そこに

「こ・・・これは！」

「血の痕・・・だな・・・」

入り口周りがペンキで塗ったかのように血で染まっていた

「っ！顔良！」

刀を抜き放ち袁紹に迫り、顔良がそれを防ぐ

ギン ギン ガギャン

大きく下がり、刀を連続で振るう

” 月影流乱撃術 三日月 影乱れ ”

「ちい！」

無数に繰り出される真空波を切り裂き、防ぐ。しかし、防ぐあまりに刃の姿を見失ってしまった。

「っ！どこだ！」

「・・・遅い・・・」

振り向くとそこに劉備を抱え、佇んでいる刃がいる。自分の失態に歯軋りをし、

「貴様！」

剣を振りかぶり、切りかかる。それを避け、顔良の心臓めがけ突きを放つ

紙一重でそれをかわし、後ろの石柱に突き刺さった。すると突然その石柱が赤く光り、祭壇が震えだした。

「っ！なんだ？・・・」

「第一の封印が解けたのだ」

袁紹が祭壇の横に立ち、刃に告げるしかし刃はいたって冷静に

「それがどうした・・・力を得るには生け贄が必要なんだろう？」

「ふん・・・顔良！ヤツから劉備を奪い返せ！」

しかし顔良は顔を伏せ、身動きしない

「どうした早くやつを・・・」

言いかけたところで突然、顔良が袁紹の胸に剣を突き刺した

「ぐは！」

「なっ！」

その行動に刃は驚いた。袁紹に忠実だった顔良が主を突き刺したのだから

「が・・・顔良・・・な・・・なぜ・・・」

「ふん・・・無能に使えと思ったのか？安く思っな！
せいぜい鬼の力の”贄”となれ」

そうはき捨てると貫いた剣を抜き、祭壇に崩れ落ちた。

「生け贄には強い魂が必要なんだろう！？なぜ！」

「言っただけだ無能に使えるほど安くないとそれに魂ならここに十分すぎるほどあるだろう？」

それは袁紹のみならずここに来る最中”刃が切り殺したたくさんの魂”が祭壇に吸い込まれていく

「感謝するぞ。封印を解き、手間を省いてくれたのだからな」

「ちいっ！」

刃は構え、氣を刀に流す。刃の持つ妖刀”嵐月”は氣を吸い続け、限界など無いような勢いで光り輝く

”月影流奥義 月光 満月”

より強い光りを纏った刀は顔良に切りかかる。しかし、それを

「ふっ」

ガギイイイイイイン

氣を纏った腕のみで防いだ。その氣は異様、まるでそこに存在するかのように紫色におどましく纏わりついている。

「なっ！」

「・・・・・・・・」

刃のあまり良いとは言えない様子に驚く、孫策よりも強く特Aクラスの開羽、趙雲さえも倒した刃が片膝を着いている。

その事実には息をのむ

その様子を愉快に思う顔良

「くくく・・・しかしこちらもうまく制御できないのですね。貴様らを殺すのは次の機会だ・・・ではな」

そう言い残すと顔良は洞窟の奥に向かい歩き出す

「っ！逃さん！」

開羽が偃月刀を握り、顔良に切りかかる。しかし幻のように消えていった

「何ッ！」

その光景に皆が啞然とし刃だけが拳を握り締め地面を殴りつける

「クソっ！」

自分のふがいなさ、そして敵に利用された自分に苛立ちひたすら地面を殴る

揺れる火の光りの中、虚しさだけが残り、刃は敗北を知った。

刃の敗北（後書き）

いかがですか？

この後の展開も考えねば

それではまた次回、感想お待ちしています。

趙雲の暴走 前編（前書き）

どうもBLEYZです。

今回はここまでにしましたが、このまま行くと

趙雲さんのキャラ崩壊が起きそうな気がしてここで止めました。

このことに見てくださっている方の意見が聞きたいと思っております。

それではどうぞ

趙雲の暴走 前編

薄暗い部屋、そこに不気味な氣を纏う男がいた

「くく・・腕の一振りで退けるか・・たいした力だ・・・」

自分の腕を眺める。不気味に纏わり着くソレは脈動を打つ

「しかし、完全ではないか・・やはり強い魂が必要か・・・」

男は何かを求める様に扉に向かって行つた・・・・・

「いいですか？刃さん・・」

「は・・はい・・」

「はつきりと――！」

「はい!!」

先の暴走が原因で趙雲に正座をさせられている刃
普段の大人しい彼女とは思えないほど怒気が見える

「まったく!・・確かに党首が危険さらされ、焦る気持ちもわ
かります。」

それでも一人で行動するなど・・・」

「す・・・すみません・・。」

先ほどから同じ事を繰り返し言われ、しかも、帰ってすぐのため
もはや刃の体力は限界になっていた

「・・・・・。」

そのおかげでついボーンとしてしまい

「聞いていますか!!」

「はいっ!!!!」

再び同じ事を繰り返し、最早、無限ループになっていた
そんな光景を眺めている人物が・・

「まゝた怒つとるなゝ子ーさん」

「ほんとだゝあたし初めてみたよゝ」

「ちよつと伯符!覗き見はやめようよ」

張飛、孫策、周瑜が見ていた

「素直に言えばええのにな〜あれじゃ逆効果や」

「?なにを言うの?」

一人わかっていない孫策を張飛が

「なにつて、子ーさんがアイツのこと”好き”ちゅーことやる?」

「ええええええええええ!!そうなの!??」

「ちょー伯符!」

「誰ですか!??」

この前と同じような事に張飛はデジャブを感じたが

「.....」

趙雲の無言の怒気に前とは明らかに違う様子に

「ちよっ!マジで逃げるで!今回はシャレにならへん」

「わっ!わかった!」

「お!置いてかないで!」

趙雲の怒りと張飛の必死さに二人は逃げようとするが周瑜だけは逃げ遅れ

ガシッ！ 「・・・逃がしませよ・・・」

「あ・・・あはは・・・」

「あなたも一緒にO H A N A S H Iをしましょうか・・・」

「

ドス黒い何かを纏いながらニツコリと笑い

「あなたも・・・覗く暇があるのなら周りを警戒しなさい」

「は・・・はい・・・」

「はつきり!!」

「はいっ!!」

さつきと同じ事でも実際に言われるとかなりの迫力
それにずっと耐えている刃に同情しながら様子を見ると

「・・・・・・・・」ボーン

うわの空、その様子に気づいた趙雲は

「あなたも！話は終わっていません!!」

「すみません!!」

ビクッと姿勢を正し再び説教は続いた・・・

「・・・・・・・・」

「こ・・・これは・・・なんだ？」

「え」と・・・刃ちゃんと公瑾だった・・・もの？」

「・・・・・・・・」

本当に屍になつたかのようになつた二人
ピクリとも動かず、呼吸をしているかも怪しい二人を見て

「はぁ・・・」

「あ・・・あは・・・」

樂就はため息が漏れる。その様子に孫策は苦笑いしかでない

「・・・・・・・・ねえ・・・・・・・・」

「「っ！！」」　ビク！

突然、声が聞こえ驚く二人

「あつ！刃ちゃん？気がついた？」

「無事か？刃・・・」

唐突に口を開く刃、それに驚きながらも気遣う二人

「やっぱり・・・趙雲さんに嫌われてるのかな・・・僕・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

刃には怒られた理由がわからず、その答えに行き着いた。

（やはりそうなるか・・・）

（・・・・・・・・・・）

「って言ってたよ」

「ほ……本当ですか？……」

孫策から刃がどう思っているかを聞いた時
趙雲は愕然と膝をついた

「どうしてでしょう……私はそんなに怒ったわけでは……」

（自覚がないんだ……）

趙雲の自覚が無いつぶやきに苦笑いをする。そこに

「困つとるみたいやな！」

勢い良く扉を開け放ってきたのは張飛

「なにか名案があるの？」

「ふっふっふっ 前、子ーさんが言ってたやろ。
手合わせすれば人のことがわかるて」

始めて会った時、人柄を知るために刃に手合わせをしたときの事だ

「いやゝそれはいくらなんでも・・」

無理と続けようとしたところで

「わかりました！」

「ええ！」

その方法に力強く頷き、孫策もいくらなんでも無理な方法に驚いた

「えゝと、やめておいた方が「そんなことはありません!!」」

「剣で通じ合えばわかるはずです！」

いつもの冷静な趙雲とは違う様子に張飛でさえ、本人が疑い始めた

「ホンマに子ーさん大丈夫「そうです、今すぐに！」聞いてへんな・・」

刀を持って走り去る、その後ろには必死になるあまり、殺気がもれ、最早、人を殺しに行く勢いであつた

「・・・大丈夫かな・・・」

「・・・なんか無理なきいしてきたわ・・」

「・・・日課・・・こなさない・・・」

疲れている体を無理に動かし、鍛錬をはじめ。しかしその顔色に
生気がない
それでも続ける

ヒュン ヒュン

風を切る音が聞こえる、だが力強さを感じない

「やつぱり・・・今日はやめて・・・明日に・・・」

刀を納刀し、部屋に戻ろうとした時、ふと後ろから荒々しい殺気を
感じた

刃は振り向き、刀に手をそえ、構えるが刃はその正体に驚くこと
になる・・・

趙雲の暴走 前編（後書き）

いかがですか？

この時点ですでにキャラが・・・

このことについて意見、宜しくお願いいたします。
それではまた次回

趙雲の暴走 後編（前書き）

どうも、BLEYZです

更新が遅れてすみません。笑いネタが書きたかったのですが納得の
いけないもの
ばかりで

というよりも趙雲を暴走させすぎました。

こんなものでも良いというかた楽しんでいただければ嬉しいです
それではどうぞ

趙雲の暴走 後編

「刃さん！」

普段の彼女とは違う様子だが刃は目の前の彼女から感じた強い殺意に戸惑っていた。

「え？あの・・・なにか？・・・」

殺意を向けられるようなことは全く身に覚えがない、それでも趙雲はどこか慌てたように殺気を刃に向ける

「そ・・・その・・・こっ！これは！私の気持ちです！！」

ヒュッ！

「うお！」

先の言葉とは裏腹に趙雲の横薙ぎの一閃を紙一重にかわす敵意が無いのに殺気を感じる。初めての感覚だがそんな事よりも目の前の事態の方が気がかりで考える余裕などなかった

「ちよっ！なにを！」

「私の気持ちをなぜ避けるのですか！」

「そんな無茶な！というより趙雲さんの気持ち？！」

殺気を籠めて刀を振ったのなら考えられる気持ちは一つしかない

（趙雲さんは俺の事・・・殺したいほど嫌い!!）

当の本人はそんなことはつゆ知らず、刀を握る手に力が入り
本当は殺気ではないのだが、強い思いが行き過ぎて殺気のようなも
のになっている

「こんなにも思っているのに避けるなんて！
なにがだめなんですか!!」

「いや、だって・・・」

死んでしまうから、と続けるつもりが・・・

「・・・いや?・・・」

「え?」

その瞬間、趙雲の氣が膨れ上がった
恋は盲目どころではなく恋は惨殺のような勢いに変わった

「そんなにも・・・私がいやなんですか!!」

（うあああもう!なにがどうなってんだ!!）

もはや理解不能な混沌とした雰囲気、どこからか走ってくる音が近
づいてくる

「ちょ!どうなっとるんや!」

「なんか暴走してるね・・・」

元凶である張飛、止め切れなかった孫策が異常を感じ、駆けつけてきた

「張飛さん！孫策さん！これはどういう・・・」

「え」と・・・

「なんつちゅーか・・・」

ことの始まりを説明しようとするが

ヒュン！ 「うわあ」

風を切る音が孫策達に向かった。

「邪魔をしないでください・・・」

「ちよっ！ちよっと何やってるんですか趙雲さん！」

孫策達の前にでて庇うようにまえにでた。

「・・・どうして・・・」

「「「へ？」「」」

「どうしてそんなにも孫策さんたちを！！？私はこんなにも思っているのに！！」

「それって……つまり……」

殺したい事か？そう疑問に思っているのはつかの間

「刃さん刃さん刃さん刃さん刃さん刃さん刃さ
ん刃さん

刃さん刃さん刃さん刃さん刃さん刃さん刃さん刃さん
ん刃さん

刃さん刃さん刃さん刃さん……」

名前を繰り返しつつぶやきはじめる

$$((\dots((1j^n \cdot \dots 1j^n) \dots))$$

あまりの壊れっぷりに皆が恐怖に支配される

(へ・・・変なこといわへんほうがよかったな・・・)

ガクガクガクガクガクガク

張飛は焚きつけたことに後悔し、二人はガクガクと震え目の前の趙雲に恐怖している

明らかにいつもの彼女ではなかった

ヒュン！

「うわ！」
シャイイイイン

突然なぎ払われた一閃を受け流す

すると趙雲は二タアつと口角を吊り上げ

「やつと・・・受けてくれましたね・・・」

「は？・・・え？・・・」

不気味に笑い、続けざまに剣を振るう
目は瞳孔が開いている

「ぎゃあああああああああああああああ」

刃と孫策はあまりの怖さに逃げ出した

「逃がしません・・・」

「ちょい待ち！落ち着けや子ーさん」

不気味な笑みで刀を握り、二人を追おうとした所で張飛が止める

「あなたも・・・邪魔をするのですか？・・・」

「いや、あいつメツチャ怖がつてたやないか！
そんなんじゃ好かれへんで？」

「え？・・・」

好かれないという言葉に反応し、不気味な笑みが消えた

「思いを伝えるために手合わせしようとしてたのに
これじゃ意味あらへんよ？」

その言葉に高まっていた温度が一気に下がり、冷静になって自分がしでかした過ちに気づいた

「ど．．．どうしましょう？」

「とりあえず．．．謝ったらええんとちゃう？」

「そっ！そうします！」

慌てたように二人の後を追う

「．．．．．もう．．．手遅れなきいしてきたわ．．．」

「ハア．．．ハア．．．」

「こ．．．怖かった」

趙雲から振り切り難を逃れたふたり、よほど走ったのか息が切れて

いる

「あ．．あれは．．トラウマになりそうだ．．．」

「あ．．あたしは、夢にでるかも．．．」

向けられた対象は刃だけだったがその光景を見ていた孫策も同じ恐怖に
駆られた

「でも．．なんで？殺されるほど嫌な事した覚えがない
だけど．．．」

「あゝ．．あれはね？」

孫策が説明しようとしたところで

「刃さゝゝん」 （（ビクッ））

遠くから趙雲の声が響き、二人は硬直した。足音は確実にこっちに
近づいてくる

二人はあの旋律の光景が頭に浮かび上がる

「ハア．．ハア．．刃さん．．先ほどは」

（（ダッ！））

二人は目を合わせることなく走り出した

「すみま．．って！待ってください！」

趙雲もささず走り出す

「うわああ！追いかけてきた！」

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

孫策は声をあげ、刃はひたすら謝り続けている
それでも謝るために趙雲は追いかける

「待ってください！話を」

「いやああああ！来ないで——」

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

泣きながら逃げる二人の逃走は朝まで続いた

趙雲の暴走 後編（後書き）

いかがですか？

もはや趙雲がヤンデレに・・・

でも後悔はしていない！

バカテス風に書きたかったのですがなかなか・・・

バカテスのキャラ・・・ヤンデレが多いと感じるのは僕だけですか？

それではまた次回、感想お待ちしております。

謝罪そして・・・（前書き）

どうも、BLEYZです。

永らくお待たせしました。その割に短いかなと思う方すみません。どうもなかなかうまくいかずにこれでもいいのか？って感じになりました

それでも良いという方、楽しんでいただければ幸いです
それではどうぞ

謝罪そして・・・

（ガクガクガクガクガク）

部屋の片隅に震える影が二つ、刃と孫策

昨晚の趙雲のことが頭から離れず、部屋の隅で小動物のように震えている

「は・・・伯符、大丈夫？」

「・・・二人ともなにがあつたんだ？」

その事を知らない周瑜に樂就はその様子をみるだけしかできなかった

「子―さん・・・やりすぎやろ・・・」

「わっ！私は謝ろうとしたのです！

しかし、急に走りだすので・・・」

前の出来事で、関係を深めるどころか、溝を掘ってしまった趙雲
この結果に呆れている張飛

落ち込んでいるところに

「どうしたのだ？趙雲」

蜀の軍師 諸葛亮孔明 が通りかかった

「軍師！」

「おお！ええところに」

「？」

孔明はわからないといった顔で首を傾げる

「子ーさんの恋路を手伝ってほしんや」

「ちよっ！張飛さん／＼」

「ふむ・・・だが趙雲よ、先ほど南陽の頭首と刃が震えていたが

なにかあったのか？」

その問いにビクツと体を振るわせる

「・・・あつたのだな・・・」

「・・・はい・・・」

それから趙雲はそれらのことを説明した

呆れ顔になり孔明は

「……………やってしまったな……………」

「ど……………どうすれば……………」

普段は見せないようなオロオロとした態度で問いかける孔明は手で顎をつき

「その事を謝ったのか？」

「い……………いえ……………その……………まだです……………」

「ふう……………ならば先に謝るのが道理だろう」

「まあ、そらそうやるな」

張飛は大きく頷く、趙雲は立ち上がり

「さっそく謝ってきます！」

気合を入れて部屋に向かう……………刀を持って

「ちょい待ち！刀をおいてけや！」

「なぜ？」

「そんなん持ってたら殺されると勘違いされるで」

「うつ・・・そうですか・・・」

渋々刀を置き、再び部屋に向かう

「なんかもう・・・すでに心配やで・・・」

「うむ・・・」

「はぁ・・・」

ため息が漏れる。刃は少し怯えるようにため息をつく
怖かったのは確かだが、殺されるまでに嫌われる要素が見当たらない
かった

「なんでだろう・・・」

あの時の事を思い出すだけで体が震える。

「・・・えーい！考えるだけ無駄だ！趙雲さんに聞くしかない！」

震える体に喝を入れ、決心する

「・・・いや、少し後でも・・・いやいや・・・」

早くも決心が鈍る、そこに

コンコン

「はい？だれですか？」

「刃さんよろしいで・・・」

ダッ！ バッ！ ダダダダダダ

「しょうか？つてあれ！」

解説すると、声の主が趙雲と判るや否や即座に窓に手をかけ、外に飛び出し走り去った。

その事を察した趙雲は膝をつき

「そこまで・・・」

「そんなレベルで逃げられてるんかい!？」

「最早、拒絶反応だな……」

「うう……」

作戦の失敗というより、謝るだけの作戦で失敗する要素は皆無なはずなのだが

「このまま……嫌われたままなのですね……」

ガンという文字が見えるほど落ち込んでいた。

「……仕方ない……荒療治でいくか……」

「?……どうするんや?」

何か思いついた様子に張飛が訪ねる

「強引だが無理やりやるしかない……」

そう言い、扉に手をかけ準備をはじめた

「くく・・・見つけた・・・」

辺りは木々に覆われ、そこに一人の男が立っていた

「くくく・・・くはははははははははは」

何かを見つけた男は高笑いを発する。その声は辺りに響かせ喜びを表している

「力を・・・天下を統一する力を手に入れた！！！」

歡喜の表情、その腕にまだ瞳を閉じている”呂布 奉先”が抱えられていた

謝罪そして・・・（後書き）

いかがですか？

最後の部分がどうしようか悩んだのですが・・・白骨はいやですね！

というのでまだ土に返っていないようにしました。

違和感があると思うのですがよろしくおねがいします
それではまた次回、意見感想よろしくおねがいします

和解（前書き）

どうもBLEYZです。

テスト&新作ゲーム&ネタ切れでなかなか執筆は進みません
速度が遅くなりますがよろしく願います
それではどうぞ

和解

「ハア・・・ハア・・・つい逃げてしまった・・・」

刃は息を切らしながらつぶやいた。あの時の光景はトラウマとなり趙雲という存在は条件反射で拒否してしまうようだ

「・・・今思うとかなり失礼な事をしたんじゃ・・・」

「・・・そうだな・・・」

「やっぱり・・・っ！誰ですか！」

いつの間にか真横に孔明が静かに立っていた。気配を感じさせずに横にいたことに驚きながらも続ける

「お・・・脅かさないでくださいよ」

「お前が失礼な事をしなければしない」

グサッ！

その一言はかなり答えたようだ。実質悪いのは刃なのでなにも言い返せない

「人の声だけでいきなり逃げるのは失礼の極みだ・・・」

「・・・はい、すみません・・・」

孔明の怒りが混じった口調に何も言い返せず、うなだれる

「そういうわけだ、趙雲に謝ってこい」

「え・・・それは・・・その・・・もう少しあとで・・・」

相手に失礼を働き、謝らなければいけないのは理解しているがなかなか言い出せない

「やれやれ・・・仕方の無い・・・張飛」

「了解や!」

どこからとも無く現れた張飛、その手には紐が握られている

「え! ちょっとなにを!」

「おとなしくしている・・・」

「ちよっいやあああああああああああ!」

あっという間にぐるぐるに縛られ、連れて行かれた

「あの・・・なぜ?・・・」

「こうでもしなければ話さえも聞かないだろう?」

「うつ・・・」

孔明のしるきに凶星を感じ、言葉に詰まる

「そうやで、いくら怖くても話ぐらいきかなあかんやろ!」

「そう・・・なんですが・・・」

汗をかきながら曖昧に答える

「まあ・・・気持ちはわかるけどな・・・」

「とりあえず・・・趙雲の話聞く事だな」

「はい・・・わかりました」

ビクビクしながらも同意する。孔明も趙雲を呼ぶため、部屋から出て行った

「まあ、心配すなや！」

「はあ・・・」

それでも不安はぬぐえない、そんな時

「刃さん・・・」

ビクビクッ！

「反応しすぎや！！」

「それほどまでに・・・」

刃の反応に二人はツツコミをいれる

「その・・・刃さん・・・」

「な・・・なんですか？・・・」

「す・・・すみませんでした！！！！」

謝りながら勢い良く土下座をする

「え！一体どういう・・・」

「その・・・前に刃さんに切りかかったことです」

「え？それって僕のことか殺したいほど嫌いだからなので
は？」

その答えに趙雲はさらに落ち込んだ表情をし、孔明と張飛はため息をはいく

「ちっ！違います！それは・・・その・・・」

答えにつまり、モジモジとしながら顔を紅く染める

「大丈夫ですか？顔が赤いですけど・・・」

そつと額に手を添える

（・・・ぶしゅ／＼／＼）

「あゝあ・・・」

「まったく・・・」

空気が抜けるかのように崩れ落ち気を失う

「え！ちよつと大丈夫ですか！」

「あゝ そつと寝かしときや」

「うむ、疲れておるのだ。」

「そ・・・そうですか・・・」

趙雲はいまだに真っ赤に染まったまま倒れている。しかし、その表情は

どこか嬉しそうにしていた

「部屋に運んどいてやれや」

「はい、わかりました」

趙雲を抱きかかえ、部屋を出て行った

「……とりあえず、誤解は解けたみたいやな」

「そうだな……一先ずはこれでいいだろう」

「くくくく……」

一人の男が石でできた椅子に座っている。禍々しく、死臭が漂うような不気味な影

その影は、まるで何かを取り込んでいるか脈動し膨れ上がっていく・

「くははははははは まさか……これほどとは」

椅子の目の前にある祭壇はまるで何かを吸い込むかのように暗く光り、
そこに眠る女性が横たわる
さらなる脅威は迫る・・・

和解（後書き）

いかがですか？

趙雲の誤解が解けました

ちよつとキャラが崩壊しましたかね

でも後悔はしていない

それではまた次回

新たな戦い（前書き）

遅れてすみません。そして作者は無事です。

私の地域は震度3だったので目立った被害はありませんでした。

決して死んではないのであしからず

更新が遅れてしまいましたのはいろいろありましたのでつつい・

・

それではどうぞ

新たなる戦い

「・・・あれ？ここは・・・」

窓から差し込む光が眩しく感じる。

「ここは・・・私の部屋・・・はっ！刃さん！」

目が覚め、前の出来事を思い出した。

「あれからいつたい・・・こうしてはいられません！」

事の真相を聞くべく部屋をでる。足が速くなり、不安に駆られる誤解が解けてないのではと、そしてふと額に手を当てられた事を思い出した

（・・・ハッ！考えている場合では！／／／）

早歩きで歩を進めた

「おはようございます」

「お、おはようさん」

「うむ」

軽く言葉を交わす、彼に疲れた表情は無く何かが晴れた清々しい顔をしていた

「昨夜はご迷惑をお掛けしました」

「あ、まあ気にせんといてや。どちらかつちゅうとうちらも悪いから」

「誤解が解けたのなら普通に接するのだな」

その反面、彼女らはどこか疲れた顔をしていた。そんな話を話していると
急ぎ足の音が聞こえてくる

「刃さん！」

勢い良く戸が開けられ、趙雲が急いだように入ってきた

「おはようございます。趙雲さん」

「えっ！あ・・・おはようございます」

あっさりとした挨拶に一瞬、驚いた

「昨夜・・・というかその・・・すみません」

「あ・・・いえ・・・その・・・私も・・・」

お互いに謝り合う、ただ二人でペコペコしている姿はなんと滑稽だった

「ですが一つよろしいですか？」

「为什么呢？」

「何故いきなり斬りかかってきたんですか？」

純粹な疑問を趙雲にぶつけた

「それは張「まつ！まあまあそれはええやないか！」」

刃の質問に不味いと感じた張飛は無理やり遮った

「それよりもはよ飯にしようや！うち、腹が減ってしゃあないねん」

「は・・・はあ」

疑問が解けぬまま、部屋を出る。そこでふと

（この誤解の原因は良く考えると張飛さんのせいでは？）

部屋を出る時、そんな疑問が趙雲の頭をよぎったが

（まあ、いいでしょう）

誤解が解け、気分良く、刃の隣を歩いていく趙雲だった

「はあゝ美味かった」

「そうですね」

食卓で蜀の皆と朝食を終え、一息ついた頃だった

「そういえば趙さん、誤解が解けたんですね！」

「はい、党首」

「それで機嫌がよかったのだな」

「それほど顔にでていますか？」

「「ああ（はい）」」

普段、目を閉じている彼女でも判りやすいほど笑みを浮かべている
ただそれを指摘されて少々顔を紅くする

「刃さんもよかったですね」

「そうですね」

刃も嬉しそうにそう答える

「趙雲さん、食後の運動がてらに軽く手合わせでもしませ
んか？」

「はい、是非」

そついい両者とも刀を手を外に出ようとした時

「みなさん！！大変です！！」

勢い良く戸が開き、そこにいたのは马超だった。息を切らし慌てて
いた

「どうしたんだ？」

「ランニングの時に偶然聞いたんですけど、許昌が落とさ
れたって！」

「「「なっ！！」」」

全員が息を飲む、許昌は曹操、夏侯惇が不在とはいえ、容易く落と
されるような

場所ではないから

「一体だれが？」

「なんか相手は予州学院と名乗っているんですけど」

「！」

刃は刀を握り締め、怒りを露わにし、つぶやく

「ついに動き出したか・・・顔良！！」

そして新たなる戦いが始まる

新たなる戦い（後書き）

いかがですか？

最近本当にネタが浮かばない・・・

地震とか日本の経済とかもう将来に希望がもてない・・・orz

友達にHARPがどうのって騒いでいました。

本当に終わりかな？

それではまた次回、感想お待ちしています

戦いの幕開け（前書き）

どうもBLEYZです

なかなか思いつかず、ノロノロとしていたらいつの間にか4月も終わって

しまいました。すみません

もったと文才があれば・・・

それではどうぞ

戦いの幕開け

「こっ・・・これは・・・」

辺りを見回す、そこにあるは瓦礫の山そして傷だらけで倒れている
魏の闘士たち

広々とした大きな校庭も何かにえぐられた様な痕がある

「酷いですね」

「いったいなにが・・・」

「もしや・・・顔良め・・・」

一つの予感が頭をよぎった。もしその通りだとしたら・・・

「まずいな・・・刃がこれを知ったら・・・」

「刃さんがどうしました？」

思いつめた真剣な表情に趙雲に不安が募る

「もしこの事を刃が知ったら・・・間違いなく暴走する」

「！　どういことですか！」

「それは・・・」

「許昌が襲われるなんて・・・いったいなにが」

「で・・・でも、曹操さんと夏侯惇さんが不在だったって言うてたじゃないですか!」

刃の眩きに劉備が答える

「ですが、力をつけたからといって顔良一人に一日で落とされるほど

許昌は弱くありませんよ」

「せやなく急に力でもつけたんかな?」

(急に力をつけた?そんな事が・・・まさか!!)

ガタッ!!

いきなり立ち上がる。その表情は不安と怒りがにじみでている顔をしていた

「急にどないしたんや?!」

「まさか・・・顔良、姉さんを・・・」

短期間で大きな力を身につけることは不可能、考えられる可能性はそれ以外

考えられず、顔良にふつつと湧き上がる怒りの感情が胸を支配する

「おっ！落ち着いてください！」

「せや！一人で行ったらまた子ーさんが！」

「っ！！！」

趙雲の名前がだされ、次第に冷静になっていく

「す・・・すみません・・・」

「ホンマにたのむで」

「ええ・・・わかりmっ!!」

突然現れた強大な氣を感じ全力で警戒なしながら嵐月を構える

「なっ！なんやこれ!!」

「張さん・・・刃さん・・・」

あまりの重圧に劉備ですら気づき、怯えた様子だ

「この感じ・・・まさか!!」

振り返る、巨大な氣を感じる方をそこに

「お察しの通り、私だよ」

最早、人とは思えない姿をした顔良が立っていた

「いそぎましょう!軍師」

「ああ、手遅れなる前に」

「許昌を落としたのなら間違いなく刃がいる成都を攻めてくるはずだ」

孔明を抱え、全速力で走る二人

「早くしなければまた刃さんが!!」

「玄德も気がかりだ」

「うむ」

先のことでは焦る様子をしている趙雲、刀を握る手が強くなる

「何事も無ければ良いが・・・」

「ええ・・・これは！」

成都へ行くために階段、そこに戦闘をした形跡があった。
所々に破壊された階段、切り傷がある木々
明らかに刃が戦ったと思われる痕があった

「遅かった・・・」

「くっ！玄德！無事か！」

他の人の安否を確認すべく走りだす

「おゝゝい！こつちやゝゝ！」

「関さん！張さん！子―さん！」

最早、残骸としか呼べない校舎の外に二人が手を振って呼んでいた

「無事か！玄德、益徳」

「おう！見てのとおりや」

「はい！大丈夫です」

「あの・・・刃さんは？」

趙雲の問い、二人は

「顔良さんと戦いながら森の奥へ・・・」

劉備が指を指すほうに木々がなぎ倒され、荒々しい惨状が奥まで続いていた

戦いの幕開け（後書き）

いかがですか？

感想お持ちします

それではまた次回

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1987p/>

一騎当千 STORM EDGE

2011年6月5日15時32分発行